
恋姫†無双～治癒の力を持つ者～

Lynx

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫＋無双〜治癒の力を持つ者〜

【Nコード】

N4315T

【作者名】

Lynx

【あらすじ】

ある日突然 恋姫の世界へ降り立った北郷一刀。彼には不思議な力があつた・・・その力を使い、彼は乱世を生き抜ける！

TINAMIと同時投稿です。どうかよろしくお願いします！

ブログ 新たな始まり(前書き)

こんにちはー Lynxです

これからがんばっていききたいので、どうかよろしくお願いします！

プロローグ 新たな始まり

聖フランチェスカ学園〈校門前〉

「かずピー！遅い！わいは待たされて感じるようなドMな変態さん
ちゃうで！」

「いやゝすまんすまん、ちょっとした急用ができてな」

「わいという最高の彼氏より大事な急用っていったらもう浮くへぶ
し！」

「周りから変な目で見られる前に行こうか、“ダーリン”？」

「お、お、う……」

ちゃんとノリには付き合ってやるものの、男には容赦ないこの人、
北郷一刀。聖フランチェスカの学生であり、剣道部所属の高校生だ。
そして彼の前で涙目で鼻をさすりながら返事をする男が一刀の悪友、
及川。よく他人が勘違いしそうな冗談を言う為、一刀にしよつちゅ
う殴られている。

「おおイタっ！かずピー、相変わらず冗談わからんやつちゃんー」

「冗談は好きだが、ホモに思われるような冗談は避けたいからな」

「そうやってツンツンして、わしの母性本能をくすぐるへぶあ！？」

「……まだこの冗談を引っ張るのか？」

「び、びえ、ぼうびいヴあぜん（い、いえ、もう言いません）」

「なら行こうか、少し遅れそうだ」

二人は歩き始め、街へと向かう。

「そんなんより、何でもここまで遅れたん？ かずピーが遅れるなんて珍しいやろ・・・」

「ああ、ちよつとその曲がりでネコがバイクに轢かれてたからね、血だらけで行くのもだめだろ？ 一度家に戻って着替えてきたんだ」

「動物には相変わらず優しいな。血まみれの動物を難なく抱きかえられるなんて」

「俺はなんで他の人そうやって対応できないのが理解できない」

「そりゃ皆気持ち悪いゆーて避けるからやろ。それに、“すぐ”治せるのはかずピーだけやし」

「そりゃそうだけど・・・」

「でも、かずピーは動物だけじゃなくて人さんのほうも治した・・・と、すまん、まだ克服できてへんか」

急に一刀の表情が暗くなったのを気づき、すぐ謝る及川。一刀は「大丈夫、気にすんな」と言い、

「この『力』はもう人には使いたくないからな・・・」

一刀は物心が付いたときから治癒の能力を持っていた。特異体質、
とでも言えば良いのだろうか。当たり前のように小さい頃から身につ
いてた為、無邪気に周りの友達に見せびらかしたら・・・

「かずとくんってへんなコー！！きもちわるい〜！」

と、その時好きだった女の子に変人呼ばわりされ、『力』を見せる
のがトラウマになったらしい。

では何故及川がこの事知っているかつて？ 知り合つて間もなく彼
の家へゲームしにお邪魔した時、彼の母親が料理中に指をパツクリ
包丁で斬ってしまい、親子ともどもオロオロしている所、あまりに
も痛々しく見えたので咄嗟に『治療』した結果、及川家だけはこの
『力』のを知っている。その人達以外で知っている人物は両親
と祖父だけだ。当然全員に秘密にしておいてと頼んである。

それ以来、人目の付かない場所で、動物達の治療はしているが、ま
だ親しい人達以外の者にこの『力』をつかう心の準備がないらしい

「あの時以来、少しは慣れたと思うけど、まだ他人に使う勇氣は無
いな」

「子供ん頃のトラウマって簡単に克服できへんからな・・・」

「ま、今は親しい人達の間だけ、非常時のみ使うよ」

「そっやな〜。あ、でも学園やつたらたぶん大丈夫やと思うで？」

「いや、学園こそ嫌だな、変な噂になる可能性がある」
「大丈夫大丈夫」かずピーって学校内で何て呼ばれてる知つとる？」
「？」

“ オアシス ”

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「かずピーってめっちゃ優しいやん？頭もいいし、人望もある。小さいことにも気づくし、何より他人への気配りがすごいええ。そのせいで、学園内の生徒達からかずピーは安らぐ存在になつとるみたいや」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「その上文武両道トップなくせして決して鼻にかけへんその性格、人間としてデキた存在やっちゆうこと。優しい性格の上、守つてもらえる存在。そんなかずピーやからこそその『力』があるんやろうなあ」

「そう、なのかな」

「ワイは絶対そう思う！あ、でもあんまり見せびらかしたらアカンで？ワイが学園内でモテなくなってしまう！・・・・つと、やつと着いたで」

話がある程度区切りついた頃、二人が目的地に到着した

「しつかしまあ、ウチらの理事長も面倒なやつぢやなあ。いきなり歴史美術館で感想文を書いて来いなんて全学生に言わせるし．．．」

「だな、まあ理事長の変な所はいつもの事だから、チャツチャと終わらせようぜ」

「はあ．．．宿題やなかったら、絶対こんな場所にはワイはおらんわー」

——とある、歴史美術館——

「お、ここは中国の後漢時代の次、三国時代の部屋か．．．」

「そうみたいやなあ．．．そういえばかずピーってこの時代が好きやったよな？」

「うん、この時代はかなり好きかな．．．こんな時代に生まれたら、この『力』いろんな人を救えただろうなあ。って思ったりするよ」

「ははは、そうやったらかずピーは神の存在になつてたやろうなー」

「それも悪くないかもな。それにしても、やっぱり三国時代はいい．．．多分、このコーナーは長居すると思うから、及川、お前はもう他にいつてもいいよ？．．．．．及川？」

さっきまで隣にいたはずの及川がいなくなっていた。辺りはシーンとしていて、少し異様な空気が周りを埋め尽くす

「及川？トイレかな・・・？ピカッ”ん？なんだ？」

友達を探しに行こうとした瞬間、一刀は廊下の置くから光るものを見かけた。その原因を探ろうと光を放つ方向へ行くと・・・

「鏡？かなり古いな・・・こんなものパンフレットに載ってたっけ？」

三国コーナーのパンフレットに目を通す一刀

「駄目だ、ない。展示してるぐらいだから重要だと思ったのに・・・じゃあこれは何だろう？」

頭に「？」マークを浮かべながら、鏡を見つめる一刀、その途端に鏡が今まで以上の光を放つ

「な、なんだ？ 辺りが光に．．！？」

やがて一刀の視界がまっ白になり．．．

「くっ、なんだ！？ 何が起きている！」

光は一刀を包み、鏡えと戻っていった

そこに残ったのはヒラヒラと落ちる一刀のパンフレットだけだった。

ブログ 新たな始まり（後書き）

自分でいうのもなんだけど、相変わらず下手だな〜オレ・・・

それでも、一人でも気に入っていただけたら、うれしいです。

メッセージなど、コメントなど頂けると、嬉しいです。どうか！
— 言！

第01章 く天の御遣いく（前書き）

久々の投稿・・・

ようやく話が始まります

第01章 く天の御遣いく

——— 荒野？？ ———

静かな夜だった。女はその小麦色の肌に似合う長い桃色の髪をなびかせ、ゆっくりと歩いていく。その数歩後ろには薄紫色の髪に褐色肌の女性・・・弓を手に持ち、周りを警戒しながら前に進む。途中、後ろにいた女性が声を出す

「ふむ・・・もう春じゃというのに寒いもう」

「あら祭、こんな所で風邪引かないでよ？あなたの力はこれから必要になるから」

「はっはっは！なあに、こんな寒さで風邪など引かぬよ、策殿」

「氣候が狂っている・・・これから大きい乱世が始まるわ・・・その乱世に乗じて、必ず大願の独立を果たすわよ」

策殿と呼ばれた女性の瞳の鋭さが増し、まるで己の野望の強さを物語るようだった

「今は袁術の客将に甘んじておるからの。独立の時にはこの黄蓋、命を賭してでも策殿の大願を果たしてあげましょうぞ」

「アリガト、祭。でも死なないでよ？あなたにはもっと妹達の面倒を見てもらわないと」

「まったく、相も変わらず儂をこき使いよって」

祭と呼ばれる女性は苦笑をしながらも、嫌な素振りは見せなかった

「それにしても、私たちはまだまだ脆弱．．．何かキツカケが欲しいわね」

「そういえば策殿、こうな噂を知っておるか？『黒天を切り裂き、天より飛来する一筋の流星。その流星は天の御遣いを乗せ、乱世を鎮静す』とな．．．管輅という占い師が言っておったの」

「そんなエセ占い師の言うことまで信じる世の中になるなんて、やっぱりこの大陸は乱れているわね」

「そういうのにすがりたくなるくらい乱れているのじゃろう」

二人とも少しだけ遠い目をしながら空を見上げる．．．

「さて、策殿。偵察も終わったしそろそろ帰ろうかの？」

「そうね、そろそろ戻らないと冥林g「ピカッ」——！！？何、今の光？」

この世とは思えないほどの光が一瞬辺りを照らす

「策殿！早く儂の後ろに！」

「祭！！何これ、視界が白く——！！？」

「策殿お！」

夜だというのに辺りが真っ白になり、二人は光に包まれた

「ん…戻った…の？」

「策殿！お怪我はっ！？」

「大丈夫よ、ありがと。周辺になんか変化は無い？」

「変化のお、これといって……ん？あそこに人は倒れておるぞ。さつきはおらんかったのに」

「え、本当？行ってみましょう！」

「策殿、危険じゃ！ええい！儂の言うことを聞けい！」

余りにも衝動的な連れの性格に頭を抱えるも、すぐに追いかける祭

「これ、男の子？」

「はあ、はあ、主よ、老いぼれを苛めるのが趣味なのか？」

「あらあら大丈夫？運動不足じゃない？」

「・・・かもしれんの、それにしてもこの孺子・・・一体どこから？」

「さつきまではいなかった・・・つまり光と共に現れたってことでしょ？さつきの占い通りね」

「こやつが天の御遣いじゃというのか？」

近づき、観察する二人。その男の格好はこの大陸では見たことの無い服装だった

「確かに、今まで見たことの無い服を着ておるの」

「連れて帰りましょう」

「ほっ・・・かなり急じゃの。なにか理由でも？」

「この子本物よ、私が保証するわ」

「・・・勘か？」

「勘よ」

「はあ~~~~。策殿の勘は神掛かっておるからの・・・しょうがない、儂が運んでやろうかの」

「ありがと（それに私好みの顔してたし、ああ、これから退屈しないで済みそうね）」

二人は男を連れて帰った・・・

——暗闇??——

??「どうふふふふ、今回のご主人様はますます私好みねい。しかも一番外史に適応しているわ。管理者として、楽しみにしてるわよん」

肉だるま『ぶるうああああ!!!!!!』・・・もとい筋肉がガツシリとしたピンクの下着一丁のおとk『ふんぬ—————
——!!——』・・・もといジヨセイ(?)が体をウネウネしながら呟く

??「この外史では・・・幸せになれるといいわねえん」

笑顔を作るが、その瞳の奥底には深い悲しみが混じっていた・・・
・
・

第01章 く天の御遣いく（後書き）

どうも、Linuxです

なにか指摘などありましたら、どんどん言っちゃってください！

少しでも気にいっていただけたら幸いです。

コメント、評価など快くお待ちしております。

それだけで作者はご飯3杯はいけます

第02章 〱 刀、自己紹介する〱（前書き）

どうも 〱 Lynxです

いやぁ・・・これで呉のメンバーにやっと会えますね！
ではお楽しみください

第02章 〱 一刀、自己紹介する

——とある部屋??——

チュンチュン、チチチ、チュン

「ん．．．ん——ん」

なんだ、もう朝になったのか．．．ってあれ？俺っていつ寝たっけ？
．．．．．まだ眠い、とりあえず顔を洗おう

「．．．．．へっ？」

体を起こした瞬間、一刀の眠気はすっ飛んだ。自分の部屋で寝ていないのに気づき、その上部屋は中華風にアレンジされていて、今まで行ったことの無い家だった。

「此処は？っていうか、俺は何でこんな場所にいる？」

『うゝん』と唸りながら考え出す。及川と待ち合わせ．．．歴史美術館．．．三国志．．．そして．．．

「光った鏡・・・か。そこから俺の記憶が無いんだよな・・・その鏡が鍵なんだけど、見かけないし。さて、どうしようか・・・ん？誰かくる？」

自分がどういう状況かわからないため、警戒する一刀。その時、扉が開き、一人の女性が入ってきた

??「おお、やつとお目覚めか」

そこには長い薄紫の髪を持つ、褐色肌の女性が一刀へ声を掛ける。

「綺麗・・・」

一刀は思わずそう呟いてしまった。無理もない。入ってきた女性はすごい美人だった。整った顔立ち、豊富な胸、武道をたしなむ者なら分かる、凄まじい鍛錬からによる無駄のない引き締まった体。そして、『氣』を自在に操れる一刀だからこそ分かる。それはその女性の体に纏わる『氣』が一切の濁りがなかった。

そんな武道家の鑑とも言えるこの肉体＋美貌を目にした一刀は考えるよりも「綺麗」と口が滑ってしまった。女は初対面の男、ましてや入ってきて第一声がそれだったので少し思考が止まったような顔をし、我に戻った途端に豪快に笑いだす。

??「はははは！この儂が綺麗じゃと？お主は面白いの、気に入っ

た！」

綺麗と呼ばれて気分が良くなったのか、それとも照れているのか、
一刀の体をバシバシ叩く

・・・・・・・・・・・・・・・・イタイ

「と、ところで、どちら様でしょうか？」

「おお、儂は黄蓋という者じゃ」

「こうがいさんですね？俺は（ん？こうがい？黄蓋！？）・・・・」

その瞬間、一刀は更なる混乱に陥った

「（待て、黄蓋って三国志の呉に所属する宿将・・・・それがこの人？『氣』は確かにすごい。武術に関しては普通の状態で隙がないところから見ても申し分ないだろう。だが何故女なんだ！？別人か？いや、そもそも俺は今三国志の世界にいるのか？）」

ありとあらゆる考えが頭を駆け巡り、一刀は難しい顔をしながら己の世界に入っていた

「・・・・・・・・い・・・・・・・・おい・・・・・・・・う・・・・・・・・おい、小僧！」

「え？あつ！すみません！」

「なんじゃ、儂に名乗らせておいてお主は黙りこくって・・・無礼な奴じゃの」

「す、すみません、少し混乱してて・・・すみませんが、後一つお聞きしていいですか？」「・・・なんじゃ？」

「こうがいさんの字って、『公覆』だったりします？」

その瞬間、彼女は少し身構え、彼女から殺気が漏れだした

「お主、何故儂の字を・・・他国からの刺客か？白状するのがお主の為じゃぞ。さもなくば・・・」

「（すごい殺気だな、まだ・・・大丈夫かな？）待つてください、完璧とは言えませんが、自分の状況を少し把握できたので・・・敵意はありません。殺気を放つの止めてくれませんか？」

両手を上げ、敵意は無いとジェスチャーする一刀。黄蓋という女性
はこれでもかつ！？っていう位彼の目を見つめ、やがて殺気を抑える

「嘘はついておらんようじゃな・・・して、お主の名は？」

「北郷一刀」

「姓がほん、名はこう、字がかずとか？」

「いや、姓が北郷、名が一刀、字ってのは無いよ」

「ほう、珍しいの・・・それで、お主は何者なのじゃ？」

「ああ、これは自分でも信じがたいけど、恐らく」

自分の状況を説明しようとした瞬間、再び扉が開き、またもや綺麗

な女性が入ってきた

??「おつ、起きてた起きてた♪おはよう少年！よく眠れた？（ん♪やっぱりいい男ね。拾っておいて良かった♪）」

明るい声の持ち主。小麦色の肌が良く似合う桃色の髪を持ち、ニコニコと一刀を見つめる

「（この人、みんなこんな美人なのか？及川に教えたら絶対俺殴られるな・・・それにこの人・・・強い）おはようございます、よく眠れたと思いますよ」

「何で思いますなの？」

「俺自身いつ寝てたのさえ覚えてないんです」

「なにそれ？二日酔い？」

「それは策殿だけじゃ」

「ちよつと祭!？」

「冗談じゃ」

「まったく、祭には適わないわ」

ケラケラと笑う策殿と呼ばれた女性、そして一通り笑い終わり、再び一刀へ顔を向ける

「ところで少年、名は？」

「北郷一刀といます。えっと、姓は北郷、名は一刀、字は無いです。あなたはどちら様でしょうか？」

「私は孫策、字は伯符。この館の主よ」

「あなたが孫策さんですか（やつぱり女性かなんとなく、把握できたかな）。泊めて頂きありがとうございます」

「ん♪礼儀正しくよろしい。さて、今あなたどういう状況かわかる？」

孫策は昨晚の事、荒野で倒れていたこと、そして噂のこと、自分が妖の類ではないかと疑われていること、今この大陸の状況、その他もろもろ一刀に伝えた。

「俺ってそんな大変な時期にきちゃったの？その上おれ自身の命も危ないじゃん」

思わず泣きそうになる位の状況に落ち込む一刀に、助け舟がきた

「策殿、僕はこやつを気に入った。それに良い氣をもっておる、あんな氣を持つ人間に悪い輩はおらん。仲間にしたらどうかの？」

「祭にここまで言わせるなんて。それにあなた『氣』を使えるの？男なのに珍しいわね」

「使えますよ。会得するのに時間がかかりましたが・・・フッフ、コンナドウクツデヒトリ？イキタイ、イキタイヨ」

小さい頃の拷問とも言える祖父からの過酷な修行を思い出し、少し壊れる一刀

「そ、そうなの・・・まあいいわ。それより、夜にまた尋問にくるから、その時まであなたが妖では無い証拠でも考えてなさい、その時に仲間にするかどうか考えるわ」

「フッフ、オジイちゃんツタラ・・・はっ！？すみません！何でしたっけ？」

「大丈夫？夜に尋問にくるからその後に出遇が決まるってこと」

「そうですか、ありがとうございます」

「せっかく私が連れて来たんだから、期待を裏切らないでよね？なにかあったら門番に頼んでいいから。いくわよ、祭」

「おう、それではまたの北郷」

「はい、黄蓋さんもありがとうございます」

そういうと二人は門番兵に命令をだし、そして去っていった。一刀は寝台に座り、今の状況を把握する為考える

「さてと、さっきの情報で整理しないと・・・ここは三国志の世界に間違いないな。孫策と黄蓋って驚いたけど、あの身のこなしからして嘘じゃないよなあ。そして、俺が『氣』を使えるってことに關して「男なの？」って聞かれたから。この世界は女性が主に強いのか？そしたら孫策さんと黄蓋さんのように、三国志で有名な将は皆女性・・・ってことかな」

「それに女性ってことは・・・実際の三国志世界じゃないのかな・・・それに『天の御遣い』なんて史実には無かったし・・・パラレルワールド・・・ってことかな」

一つ、一つ、不可解な点を解決していく一刀

「しかしこんなに落ち着いているなんて、爺ちゃんの言いつけを守ってよかった」

——回想 数年前——

祖父「一刀、お主は儂を凌ぐほど強くなった。北郷流を継がなかったのは残念じゃが、愛する孫がここまで成長したのをうれしく思うぞ」

一刀「ありがとう、爺ちゃん。爺ちゃんから学ぶものたくさんあったし、いつでも尊敬してるよ」

祖父「ほっほっほっ、うれしいことを言ってくれるのう。それでは、最後の助言みたいなのを授けようかの」

一刀「はい、お願いします」

二人にさっきまで会った笑いと笑顔が一瞬で真剣なものとなる。祖父は一刀の目を見て、口を開ける

祖父「心して聞くのじゃ。よいか一刀よ。いかなる時でも状況を把握することに専念しなさい。情報は制すものが世界を制す、っと良く聞くじゃろ？正しくその通り、情報は武力を上回る時だつてある。

ならその情報を第一に求め、その情報の基、自分の立場を把握し、行動をとれ。冷静になれとは言わん。感情が豊かなのがお前の取り柄だからの。じゃがその感情をもった上で、自分の状況を見据えるようになれ。そしたら、お主はいかなる時でも、正しい判断が出来るよ」

一刀「．．．うん。ありがとう爺ちゃん。その言いつけを心して守るよ。本当にありがとう」

祖父「よし！そしたら今から飲みにくぞ！儂より強くなった祝いじゃ！今夜はたっぷり飲め！」

一刀「ちよつ、爺ちゃん！オレまだ中学だから法律的に飲めん」家で飲むからばれないじゃろ！行くぞ！」って．．．ただ爺ちゃんが飲みたいだけたる！そしたら一人d「そしたら一刀をおちよくれないではないか！」開き直り！？駄目だったら！駄m「ええい、うるさい！逝くぞ！」漢字が違う！ちよつ、マジ、じいc h、ちよ．．．アーーーーーー！！！！！」

—— 回想終了 ——

「．．．なんか、最後らへんに恨みがこみ上げてくる状況があったような感じだったけど、まあいいか。それより、どうやって説明しようk「ぐうー」おなかすいた．．．」

空腹に負け、門番の人に食べ物を頼むと、以外とアツサリとしたおいしい中華料理が出てきた。おいしく頂き、自分を証明する方法を模索しながら、睡魔に襲われ、眠りについた

「．．．い。ほ．．．う．．．お．．．んか」

「ん、ん？ちよと無理、後5分ぐらい寝かしてくれ」

「ええい！お前の尋問になにわけの分からんことを言っておる！さつさと起きんか！」

「．．．．．尋問？」

尋問、またの名をinterrogation＝質問に強制的に返答させること．．．ってそうだった！（ガバッ）

慌てて起きると、目の前には孫策さんと黄蓋さんが呆れた顔でこちらを見ている

「オハヨウゴザイマス」

「まったく、肝が据わっておるのかただの馬鹿なのか」

「いや、ただ考えることを止めたら眠くなっちゃって」

「ま、びくびくしているよりはマシよ。それじゃ尋問始めるわね」

「ん、出来るだけ答えれるようにがんばるよ、よろしく」

「？」「ふっ、よろしくするかどうかは私が判断させてもらっ

途端、二人の後ろから一刀の前に長い黒髪をなびかせる背の高い女性が現れた。

「（これはまたすごい美人だな。完璧すぎるっていいほどだ。ん？もしかして・・・）え〜っと、周瑜さんでよろしいですか？」

「！？どうして私の事を知っている？」

「いや、ただ貴方の言った言葉、貴方自信がオレの処遇について判断できるとしたら頭がキレるはず。その上、館の主孫策さんを差し置いてそういう判断ができるってことは彼女が貴方にそれまでの信を置いているって証拠・・・そしてその素敵な容姿、『美周郎』と謳われた周公瑾しかないかなあ〜って思っただけ」

確証がなく、推理の上、勘で言ったため、頬をポリポリ指で掻きながら述べる一刀

周瑜は驚きで目を開き、二人は満面の笑みを作り、その瞳はキラキラと期待に満ちていた

「すごーい！頭がいいのね♪ねえ冥琳、この子やっぱり孫呉に入れるべきよ！」

「冥琳よ、儂も策殿に賛成じゃ、ここまで考えることができ、良い氣をもつておるとしたら放っておけんじやろう」

二人は興奮気味に冥琳に一気に話し出す。そして我に返った冥琳は、興奮気味の二人に言い返す

「雪蓮、祭殿！そんな簡単に判断しないでもらいたい。人を見抜くは軍師の役目。（しかし、僅かな言動と周りの状況だけでここまで考える頭脳・・・恐ろしい、が、素晴らしい）さて、北郷、といったか？自分がどういう人物か説明できるか？」

一刀は自分が未来から来た者だと説明した。歴史のこと、その中で三国時代のこと・・・その歴史と少々ずれがあること（性別面で）・・・そして、未来から来たという証拠として、まだこの大陸に存在しない携帯で写メで写真をとり、なんとか自分が妖では無いと証明できた

一通り説明が終わり・・・冥琳は少々目を瞑り、今までのことを整理する。そして再び一刀を見て、口を開く

「・・・ふむ。疑って悪かったな北郷。軍師の役目上、必要なことだったからな」

「大丈夫だよ。自分自身もこんな状況の俺は怪しいと思うのは当たり前だと思うから、あやまらないでくれ」

「そう言ってくれると助かる。雪蓮、祭殿。この者は怪しい人物ではないと判断した。むしろ、人柄は非常に良いといってもいいだろう。処遇は雪蓮、貴方に任せる」

彼女の判断に嬉しかったのか、二人は満面の笑顔を浮かべる

「おうおう、お眼鏡に適ったか．．．儂もこやつは気に入ったからの（こんな老いばれに綺麗だといってくれたしの）」

「うんうん」よかった。ねえ貴方、これからどうするつもり？」

「ん？あれ？そこまで考えてなかったかな」

「行く宛ては？」

「あるはずもなく」

「生きる術は」

「この世界のことまったく知らない俺には無理（もしかして、いない子？）」

「じゃあさ、私達と行動しない？」

自分の無力さに落ち込む所、孫策が救いの手を差し伸べてくれた

「え？いいの？俺としてはうれしいけど、そっちに迷惑じゃない？」

「大丈夫よ」そのかわり、孫呉の為にその知識、使わせてもらうわよ」

「ありがとう！どこまでできるかわからないけど、精一杯がんばるよ」

「（本当にいい人ね．．．よかった、あそこで見つけて）うん」なら真名を交換しましょ。私の真名は雪蓮よ」

「えーっと、まなつて何？」

初めて聞く言葉に、『？？？』を浮かべる一刀。そこに周瑜は答え

てくれた

「真の名と書いて真名という。自分の誇りや生き様を表す名。自分が許す相手しか呼ばせない神聖なる名。知ってても相手が許す限り呼んではいけないものだ」

「あ、だから３人はお互い違う名前で呼んでたんだね」

「そういう事だ」

「そんな風習があったんだ・・・ありがたいね」

「ほう、なぜそう思う？」

「それはお互いの最高の信頼の証ってことでしょ？お互い認めあった以上、裏切られない。その上、お互いの生き様を認め、そのお互いの生き様をこれから共有できるってことじゃん。重いけど、嬉しいことだと思う」

その答えに満足したのか、周瑜は笑顔を浮かべる

「ふむ。よくぞそこまで考えた。私の真名は冥琳だ、よろしく北郷」
「冥琳にまで真名を許されたか・・・お主はやはり面白いの。儂の真名は祭じゃ。よろしく頼む北郷」

「雪蓮、冥琳、祭さん」

一人ずつ顔を見て、真名を言う

「俺は真名はないけど、名前の一刀がそれに一番近いから、一刀と

読んでくれたら嬉しいかな。これからよろしく！それから、ありがとう！」

最悪な状況だった

殺されてもおかしくなかった

今頃野たれ死んでいたかも知れない
だけどこの3人に救われた

そう思い、今までになかった安心しきった笑顔を浮かべる一刀

「よろしくね♪（うゝん♪この笑顔は好きだわ！こんな安心感何年ぶりかしら）」

「お前のその頭脳、孫呉の為に使わせてもらうぞ（い、いい笑顔だな。まるで孫堅様に抱き締められた時のようだ）」

「これからよろしく頼むぞ、北郷（『氣』だけではなく、こんな逞しい笑顔もあるとは。これから頼りになりそうじゃ）」

北郷一刀、知らないこの世界に来て最初の人との繋がりを築いた瞬間だった・・・

第02章 〱一刀、自己紹介する〱（後書き）

自分で読んで文才本当でないな・・・

勉強になります。もっとなんばる！

コメント、駄目だし、何でもお待ちしております

第03章 一刀、皆に挨拶（前書き）

今回は皆への紹介です！。

一日にもっと時間があれば！

・・・はあ

第03章　く一刀、皆に挨拶

数日後

明朝——雪蓮、冥琳、祭が信頼する呉の主要メンバーが玉座の間に集まった・・・

天の御遣いが呉に現れた・・・そう報告を受けたただだった。あの胡散臭い占いを自分達の主が信じたという不安感と、もしかしたらこの乱世に平和をもたらしてくれるという期待感を両方抱え、呼び出された者達は玉座の間で己の主君の到着をまつた。

少し経つと雪蓮が冥琳、祭、そして一人の男を連れて入ってきた。呼び出した人全員いるか確認した後、笑顔でとんでも無い言葉を放つ

「みんな、今日から私達の軍に加わる天の御遣い北郷一刀よ。一刀、ちよつと挨拶して」

「あゝ、北郷一刀です。よろsh——」

「あ、そうそう、将来此処にいる皆の夫になるから」

「——しくおね、が・・・い・・・」

シ

全員
+
一刀

に入っただろう

顔を真っ赤にしているもの……

口をあんぐりと開けて呆けているもの……

「……はあ」と溜息をして手を眉間に寄せるもの……

いきなりの理不尽な言動に少し怒りを抱いたもの・・・

その他もろもろ・・・反応はとにかく色んな種類があった。一刀は荒野で拾われたその日以降この事は全く聞いておらず、一刀自身も驚いていた。いったいどういった経路でこんな事になったのか知りたく、一刀は雪蓮に問いだす――

「ちよつ、雪蓮これh『貴様あ！！！！』おわっ！」

その瞬間、いきなり首筋に剣があつた・・・一刀はいきなりの出来事で反応できなかった。剣の持ち主を見ると、そこには一言も喋らず、睨みだけで人を殺せそうな殺気を放っている紫色の髪をもった女性が一刀に剣を当てている。

その後ろで殺気と共に「貴様」と怒鳴ってきた女性は、雪蓮に良く似た格好をしており、同じ桃色の髪を持つ子だった。

一刀は何がいけなかったのか知らず、ただ驚くだけだった――

「ちよつ、なんで！？俺何かした！？」

「貴様、よりにもよって王であるお姉様の真名を呼ぶとは。無礼者！思春、そいつの首を斬れ！」

「御意。黄泉路で後悔するんだ『待ちなさい思春！』――っ！？」

首を斬る瞬間、雪蓮が叫び、思春と呼ばれた女性を止める。そして、明らかに怒った表情で、先程自分を『お姉様』と呼んだ子に話しかける

「蓮華、私は自分から彼に真名を許したのよ？彼も私にそれ相応のものを預けた・・・お互い信用した同士の者の傍らに何の事情もしらない貴方がそんな行動をするのなら、私も『王』として許さないわよ」

「お、おねえ！・・・さ、ま？」

蓮華と呼ばれた女性は自分の姉の雪蓮の顔を見た途端驚いた・・・今まで王として自分にここまで怒気をぶつけてきたのは初めてだったからだ――

雪蓮は明らかに怒っていた。なぜなら先日初めて真名のことを知った一刀は・・・

（お互いの生き様をこれから共有できるってことじゃん。重いけど、嬉しいことだと思う）

と言ったからだ。ただの信頼関係だけじゃない。その真名をお互い預けることで、これからの未来は共に歩んでいくと理解したからだ。つまり一刀は会ったばかりの雪蓮の生き様を認め、共に歩むと誓ったも当然。この世界に間もない人が、今の乱世の時を知り、それを知った上で共に生きていくと・・・信頼すると・・・

雪蓮はそんな一刀に感動していた。真名の風習が全く無かった彼が、

お互いの信を預け、認め合うと覚悟したからだ。雪蓮は、そんな一刃に何の事情もしらない妹が自分勝手の行動で殺そうとしたのが許せなかった。

彼女は殺気を自分の妹に向け、南海霸王を鞘から抜いた

「お、お姉様!？」

「剣を下げよと思春に命令なさい」

「は、はい」

蓮華と呼ばれた子は初めて自分の姉の殺気を当てられ、怯えてしまった。そして自分が頭に血が上った状態であった行動がどれほど自分の姉を傷つけたか理解し、悔いた。

「・・・思春、剣を下げていいわ」

「・・・^{スッ}御意」

彼女が剣を下げると共に、雪蓮も殺気を無くした。女は無言で蓮華という女性の後ろへ下がった

「（姉様が殺気を私に向けるなんて、それをさせたあいつは何者？）
そこのお前、すまなかった。非礼を詫びよう」

「いや、姉と君主思いつてことは今ので分かったよ。でも、一つ言

わせてもらうよ？理由を聞かないで行動をとるのは誰でもできる。君たち二人みたいに人の上に立つ者はちゃんと理由を把握してから行動しないといけないんじゃない？」

蓮・思「・・・・・・・・」

苦笑しながら注意する一刀。初対面なのにキツパリと二人に注意するのは普通怒りを買うものだが、あまりにも正論だったため、反論できない。雪蓮からの殺気もあつたため少し冷静になったのか、一刀の言った言葉が将来的に自分の為になることだと理解し、ただ彼の言葉を受け入れることだけしかできなかった

「とは言っても・・・雪蓮、いきなりなんて言い出すんだ。オレが夫のどうのこうの。そんな事言われなかったよ？」

一刀は先ほどの騒動の原因に問いだす

「何より嬉しいことじゃないの？こんな可愛い子達とまぐわれって言ってるのよ？貴方が『天の御遣い』だから頼んだのよ」

「・・・なるほど・・・天の御遣い、孫呉にその血が注がれるってことで今後の呉が栄え、そしてそれを他国へ知らせ、呉に対して畏怖の念を抱かせるってことか・・・」

「あら、さすがね。一つを聞いて百を得るってどこ？」

「はぁ・・・まあそれだったら仕方なく受けるけど、お互い合意の元では無い限り絶対嫌だからね。それに、俺は前の世界ではこういう経験は無いから、あまり期待しないでよ？」

「（こないいい男を欲しくないなんて、天の女性の目は節穴ね）あ

たりまえじゃない、私ならいつでも大歓迎よ」

「／／／／／か、からかわないでくれ／／／／／」

一刀は前の世界では武術と自分の趣味に没頭する人生を送っていた為、普通に会話したりするのは問題ないが、性的な話題になるとすぐ恥ずかしくなる面がある。雪蓮は自分の発言に一刀があたふたしているのが面白かった

「（真っ赤に名って．．．ふふ、可愛いわね）とにかく、みんな自己紹介なさい。夫になるにしろならないにしろ、天の御遣いとして呉に貢献してくれる心は本物だから」

雪蓮がそう告げると、一人ずつ一刀の下へ歩んでくる

「はあ、い、私は陸遜、字は伯言、真名は穩。穩と呼んでください」

「（煩惱退散！目を下げるな！下げちゃ駄目だ！）こ、こちらこそよろしく、一刀って呼んでよ」

「はあい、では一刀さんと呼びますねえ」

「うん、これからお世話になるよ、穩」

「わ、私は周泰、字は幼平、真名は明命です！よろしくお願いします！」

「（元氣一杯でかわいいな）明命ね（ナデナデ）」

可愛いらしさが堪らず、思わず彼女の頭を撫でる。最初は驚くものの、女の子は次第にトロンとした顔になる

「はうあゝゝ（お猫様になった気分です）、はっ！？よよよ、よろしく願います一刀様！」

「ははは、こちらこそよろしく明命！」

「はい！さあ亜莎、貴方の番ですよ！」

元氣一杯な返事が来た後、明命は後ろから一人の女性を連れてきた

「あ、あの！わ、わたしは、呂蒙、字を子明・・・真名をあ、亜莎といいます」

「よろしくね、ナデナデ亜莎」

緊張してカチカチになっている彼女の愛くるしさにまたもや考える前に手が出て頭を撫でています一刀。すると彼女も次第に目を細め、幸せな表情になっていく

「（わあ、撫でられるのってこんなに気持ちよかったのでしょうか？）はい。こちらこそよろしく願います、御遣い様！」

「ああ、それはなし。北郷か一刀がいいな」

「え？は、はい・・・それでは・・・か、一刀・・・様／＼／＼／／／／」

「ん！これからよろしくね、亜莎」

「は、はい！」

「先ほどのことは失礼した。私は孫権、字は仲謀、真名は蓮華だ。これからのお前の働きで見極めさせてもらう」

「私は甘寧、字は興霸、主の命により真名を許そう、思春だ」

「蓮華と思春だね、これからもよろしく」

一刀は手を差し出す

「握手はしない、そういうのは慣れてないからな」

「……………（スッ）」

蓮華は照れた顔で拒否し、思春は無言で彼女の後ろへ下がった

握手の為に手を差し出す時より、拒否されてから手を下げるときの方が勇氣いるんだよ？…………グスン

自己紹介が一通り終わった後

「さて、自己紹介も終わったところだし、今から一刀の歓迎会を祝うためにs『酒を飲もう……とは言わないわね雪蓮？』め、冥琳！？」

「ここ数日、一刀を理由に政務をほったらかしにしてたから、かなり溜まっているぞ」

「いや〜ね、天の御遣いなんてすごいのが仲間に入ったら、ね？それ」
『（ガシッ）』め、めいり〜ん！！怖い！！つかコワイ！」
「何とでも言え。今日こそ、溜まった書簡全部済ませてもらう」
「えーっ！いやあ〜！！！！一刀助けてー！」

一刀へ救いを求める雪蓮

「メイリンノイウコトキイタホウガイヨ？（こ、コワイ！今の冥琳にそれ以外の事を言ったら、何か分からないけど『危ない！』って脳がシグナルだしてる！）」

「ほう、天の御遣いからの許可を得たから尚更逃がすわけにはいかな。すまんな北郷、お前の為の宴は、明日でもいいか？」

「別にしなくてもいいのに・・・でも、嬉しいな。ありがとう！いつでもいいよ」

「そうか、では雪蓮・・・書類が貴方を待っているわ」

冥琳は決して目が笑ってない笑顔で雪蓮を連れ出す

「うわ〜ん！い〜〜〜〜や〜〜〜！！！！一刀の薄情者ー！！！！」

足をバタバタ手をパタパタ・・・雪蓮は冥琳に引きずられながらも喚いていった

一刀を紹介するこの日は、無様な王様の退場姿で終わりを告げた
後から知ったが、雪蓮はよく自分の仕事をサボり、冥琳に押し付け
るらしい。。。

その夜は、政務室で泣きながら筆を動かし、喚いている王様の声が
一晩中響いたらしい・・・

第03章 〱一刀、皆に挨拶〱（後書き）

もつと日本語を勉強しないと。最近つかってないから心配だなあー
（汗）

コメント、指摘、お待ちしております（ペコ

楽しんでいただけたら一言！

第03章1節 蓮華と思春、一刀を知る（前書き）

前回で一刀はあまり蓮華と思春と仲睦まじくなかったなので、ちょっとここで一刀との関係を・・・

読んでいただけたら嬉しいです♪

第03章1節　蓮華と思春、一刀を知る

早朝、庭

VIEW：　一刀

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は早朝木陰で瞑想を行いつつ、これからのことを考えていた

「（雪蓮達は本当に良い人達だな・・・得体も知れない俺を厚く迎え入れてくれた。雪蓮達の話によると、これから乱世が始まる・・・俺の記憶が正しければ、最初は確か黄巾党だったっけ。必ず沢山の人が傷つくだろう・・・それを俺は治せるのか？）

50

迷っていた。俺の治癒力は今の時代にはもってこいの代物だろう。だが俺自身が経験した幼少時のトラウマのせいで多少抵抗がある。情け無い話だが、小さい頃にできた傷というのはどうも忘れずらい・・・頭で解決しようにも、自然的に体が拒絶反応をだすからだ

「（まあ、天の御遣いって肩書きのお陰で、多分妖術使い呼ばわりはされないと思うけど・・・とりあえずは使わざるを得ない時になるまで伏せておこう・・・）ん？」

少し肩の上に重みが掛かった。目を開け、肩に目をやるとそこには小さな小鳥が乗っていた。そして間も無く、リスや他の小動物が俺の周りを囲んでいた

「なんだ、お前達も一緒に瞑想したいのか？」

冗談気味に話しかけ、一番近い肩の上の小鳥を指で撫でてあげると、気持ち良さそうに撫でられていた。

他の動物たちも頭、足や太もなどに陣取り、幸せそうにしている

「ははっ、かわいいな。他の人達も、この子達のように俺の事好きでいてくれたらいいのに・・・」

とりあえず怖がられる、怖がれないは別として、俺は雪蓮達を支えよう。今、呉の民達が必要なのは俺のくだらないトラウマよりも大切は幸せと平穏だからな・・・

それにしても、さっきから二つの視線が・・・この氣は・・・はあ、まだ認めてくれないのかな・・・

俺は先程からこちらに向けてる視線の方向へ振り向き――

「そこで隠れてないで、二人ともこっちに来て話そうよ」

V I E W E N D

「そこで隠れてないで、二人ともこっちに来て話そうよ」

一刀がそう述べた直後、茂みからガサガサと二人が出てきて、自分の正体を見せた・・・

そこには驚いた顔をした蓮華と、不可解な表情を表す思春がいた。少しの間沈黙が流れたが、それを断ち切ったのは思春だった

「・・・どうして我々の気配が分かった」

「俺自身、気配や氣とかにちよつと敏感でね・・・この子達も君たちの存在に気づいてたし」

一刀は笑顔で自分の肩や頭やらにいる小鳥達を撫でていた。その光景が珍しいのか、あるいは羨ましいのか蓮華がこちらへ来て小鳥へ手を伸ばす

「やけに動物に好かれているのだな。それに逃げない鳥なんて初めてみるぞ（バサバサッ）——あっ!？」

蓮華が触れようとする瞬間、小鳥は避けるように一刀のもう片方の肩へ移る。こんな可愛い小鳥に拒否されたのがショックなのか、少し肩を落とす蓮華

「あゝ、何故か俺以外に触れるとこの子達って拒絶しちゃうんだよね。多分、これが出るのは俺の『氣』の性質だからみたい。だからそんながっかりしないです」

手を握られている所から、蓮華は急に暖かい感情に包まれた・・・それはこの握られた一刀の手から伝わっているのを感じ、その正体は彼の『氣』だと気づくのに時間は掛からなかった

「こ、この感じはお前の氣なのか？一体これで何を（パタパタ）——え？」

まったく理解できなかった蓮華に、さっき拒絶した小鳥が急に彼女の肩へ留まった
いきなりの出来事で驚きを隠せない蓮華に、一刀はニツコリと微笑み答える——

「体の一部に触れると、俺の氣を分け易いんだ。俺の氣を纏った人は、この子達も心を許すらしい。何でだろう？オレの氣は動物達が好きになるような、匂いみたいな物でも有るのかな？」

ハハツと笑う一刀だが、蓮華にとっては今の状況を理解するのに精一杯だったので、笑えなかった

「（何だっというの？暖かい・・・まるで昔母様に抱きしめてもらった感じ・・・以前に祭が言ってたわ、『氣とは、その持ち主の性格を写したものである・・・』と。これが北郷の『氣』・・・か。すごいわね、本当にさっきまで触らしてくれたかった小鳥達は何も無かったように私に触れてくれているわ）」

ようやく状況の整理が少しできて冷静になった所、自分に触れている小鳥達を目一杯堪能することにした――

VIEW： 思春

蓮華様のあの笑顔――

呉が袁術の客将になって以来、あそこまで幸せな顔したことは無かった……

王の家臣達の私たちが成し得なかった事を、こいつはいとも簡単にやってのけた

そして、私が何よりも驚いたのはあいつが蓮華様の手を握った後の出来事だ。手を握る際、殺気や他の邪な気配はしなかったので静観していたが、問題はそこじゃなくてその後だ。『氣』をあそこまで楽々と扱えるものなのか？否、私は幾度無く鍛錬に励み、『氣』を操ろうとがんばった。でもどんなにがんばろうと無理だった

黄蓋殿が以前言ってくれた。「儂でも氣を完全に操ることは出来んからの……」じゃが儂はちよつとやこれらの敵将じゃ負けん。一騎当千の将は皆『氣』を持っておる。ただ無意識に使っているだけで自身が使っておると気づいておらんじやろう。じゃが、もしそれを操れるようになったら、とんでもなく強くなれるということは確かじゃがな」

そつ、氣は鍛錬すれば己自身に使える程度ならほぼ誰でもできる、

という簡単なものではないと言っていた。氣を扱えるのはごく一部。それだけでも一角の将になれるぐらいの資質があるもの。しかし、その自分の氣を相手に送り込み、一時的な放出ではなく、その相手に留めるといふ行為には莫大な氣とコントロールが必要．．氣の熟練者の祭さえそれは出来ない。仮に出来ても、ほんの一瞬しか留められないだろう．．．

それを息一つ乱さずやってのけるこいつは．．．

まあ、いい。これからこいつの事を知っていけばいいのだ。とりあえず、蓮華様の本当の笑顔を戻してくれたことについては認めよう。

北郷一刀．．．不思議な奴だ．．．

V I E W E N D

蓮華が動物達と触れ合って少し時間がたった後、一刀が再び口を開ける

「それじゃ、そろそろ止めるけど、手を離していいかい？」

「．．．っえ？ あ、ああ、もう大丈夫だ」

少し残念そうな顔をするが、さすがに我侭は言えないだろう．．．
一刀は氣の放出をやめ、その途端に動物は蓮華から離れすぐ一刀にくつついた。その光景を見て蓮華は少し残念そうになるが、貴重な経験をさせてくれた彼には感謝の念しかなかった

「北郷、貴重な体験だった。感謝する」

「ん？ いいよいいよ、これぐらい問題ないさ。また触れ合いたかったら言つてね」

「あ、ああ。感謝する／＼／＼／＼／＼」

「それで、こんな朝早く庭で何をしていたんだ？」

「うむ、冥琳があちらの方で軍議を行うらしい、お前を呼んでこいと思春が頼まれてな。私はただの付き合いだ」

「そうだったんだ、わざわざ呼んでくれてありがとう！行ってくるよ。またね蓮華、思春！」

体を起こし、動物達にまたね、と言う。そしたら一刀の言葉が分かったのか、小鳥達は飛び立ち、動物達は元のいた場所へ帰っていく。そして一刀は二人に別れを告げ、冥琳のいる場所へ移動する．．．

一方残された二人は――

「．．．ねえ、思春」

「何でしょうか蓮華様」

「私は、初めてあやつと会った時に犯した自分の行動が恥ずかしい」

「蓮華様は悪くありません自分の姉の真名を知らない輩が呼べば、当然かと」

決して彼女の行動が悪いというわけでは無い。真名とは、そして王の真名とはそこまで大切なことだからだ。しかし、一刀という器と触れ合ってしまった以上、早計な行動に蓮華少し後悔しているのだろう……

「ふふ、ありがとう……でもいいのよ。あなたも感じたでしょう？彼の氣を……」

「……………」

「私はあそこまで安心する気持ちになるなんて母様以来……いや、むしろ初めてと言っていいほど安らいだわ……袁術の下で客将なんてしている孫呉の立場なのに、ここまで気持ちが晴れたのは初めてよ……そんな心優しい氣を持っている彼に、あんな行動を取った自分が愚かに思える……」

「蓮華様……」

「あなたはどうかの？彼の印象は」

「……正直、驚いてます。あそこまで『氣』を上手く操れる人は生まれて初めて見ました。故に、あやつは一角の将、あるいはそれ以上でしょう。悪い『氣』は持つてないと分かるので、呉で迎え入れるということを認めざるを得ないでしょう」

穏やかな表情で思春は彼が去っていった方を見つめた

「へえー、思春が男についてそこまで言うなんて。彼に惚れちゃっ

た？」

「なっ！？お戯れを．．．そんなはずないでしょう」

「顔を赤くしてそんな事言っても説得力無いわよ？」

「．．．蓮華様！あちらで孫策様が北郷に抱きついてます！」

「な、なんですって！？」

蓮華はすぐ振り向くが誰もいない。振り返すと、思春がそばから消えていた

蓮「思春、そんな照れ隠しなんて．．．初めてね．．．でも君主の私を騙した拳句逃げたつてのはちょっと許せないわね．．．フッフ、ユツクリオハナシガヒツヨウネ．．．フッフッフ」

ダークネス蓮華は目覚めつつあった．．．

余談だが、その翌日蓮華を城で見かけ、その傍には何かに怯えたようにビクビクと拳動不審になっている思春を見かけた．．．

第03章1節 蓮華と思春、一刀を知る（後書き）

もつとがんばらなきゃ。日本語が悪くなっていく！

頭で描いているストーリーをちゃんと言葉にかけたらなあー

では、コメントお待ちしております♪

第04章 〽軍議に参加!〽 (前書き)

どうも、Lynxです。

がんばって書きました! ってか、本当に文才がないなーって思います。日本から買ってきた国語の教科書でも勉強しようかね (汗

第04章　く軍議に参加！く

庭園にて

蓮華と思春から冥琳が庭で待っていると連絡を受け、一刀は言われた場所へ向かう。そこには冥琳、祭、穩が話し合っていた。足音に3人は気づき一刀へ目を向ける

「冥琳、それに祭さんと穩まで．．待たせちゃってごめん」

「かまわん、急な呼び出しですまない」

「全然大丈夫。それにしても、いいの？俺が軍議なんかに参加しても」

「こちらには人を働かさないで置ける余裕もないし、人材が豊富というわけでもない。それにお前とは知り合って数日間しか経ってないが、かなりの洞察力を持っていると判った。軍の知識はまだ無くとも、お前が思いついた事、何でもいいから言ってくれと助かる」
「意見はいくつあっても問題ないですからね」

「それにここではしつと良い案を出してみる。惚れるかもしれんぞ？」

「あはは、まあ惚れるか惚れないかは置いて．．出来る限りのことをするよ」

快く承諾してくれた一刀に感謝しつつも、冥琳は一刀に問いかける

「助かる。北郷よ、どうして我々がここで軍議をしているか判っているか？」

「“見られる”けど、“聴かれない”為でしょ？」

「・・・即答だな。もつと説明してみろ」

「今は袁術の傘下に甘んじている以上、普通の部屋とかで軍議をすれば監視されやすい。だから外に、そして庭の中心なら誰かが近づくのを気づけるからね」

「ほええ〜」と感心する穩と、「ウムウム流石じゃ」という祭。その横で冥琳は感心し、笑みを浮かべる

「（ここまで頭が回るとはな・・・頼もしい限りだ）その通り。それでは早速軍議を始めよう」

冥琳がそういいだすと全員の表情が真剣なものとなった

「北郷、先程穩達と相談してたのは、さっき袁術から黄巾党討伐の要請が来たことだ」

「黄巾党討伐？いつも冥琳一人で判断してたのに今回は穩も必要なんだ？」

「そうですね。今回は北方と南方、両方に賊が現れちゃって、袁術から『多い方の北方を退治するのじゃ！』って要請が来しました」

「聞いた情報によると、南方は数千、北方は5万ぐらいの大軍だそうじゃ。われら孫呉が出せるのは5千程度・・・無理に徴兵して1万・・・それぐらいなら我らの優秀な将がおるからなんとか撃破できるのじゃが・・・」

「兵の損失は免れん、か・・・孫呉の未来の為、兵の損失を最低限に抑えたいのだが・・・」

「うん」と三人は唸る・・・

「・・・袁術に出させたら？」

突然一刀は発言した。その言葉に三人は理解できず、首を傾げる

「ほえ？」

「どういう意味じゃ？」

「どういうことだ北郷？説明してくれ」

「まず、みんなの情報からして、袁術に無茶な注文をされたってことでしょ？」

3人は頷く。それを確認し、一刀は続ける

「逆手に考えたら、袁術自身は北の方と戦うことは避けたいって事。だから退治する変わりに袁術から兵士、資金、食料を提供してもらえばいい。それに応じなければ、すぐに軍を出して南の方を撃退し、その勝利をここ荊州に宣伝したら、太守としての威厳を失わない為に袁術は俺達なしで相手をしなくちゃいけない・・・という考えだけど、どうかな？」

3人は少し目を見開き、一刀をじっと見つめる

「だ、駄目だったかな？」

恐る恐る尋ねる一刀。それを冥琳が返事する

「いや、袁術の性格からして、確実にその案に乗るだろう」

「ほええ〜一刀さんすごいです〜。見直しましたよ〜！」

「ここまでの男だったとはの・・・さすがじゃな、北郷」

豪快に笑い、背中をバシバシ叩く祭・・・嬉しいけど、痛くて素直に嬉しくなれない・・・イタイ・・・グスン

冥琳は自分の頭の中で案を纏め、思考が終わり次第命令をだす

「穏、さっそくこの事を雪蓮に伝えてくれ、祭殿は兵の準備をお願いします」

「はい」「心得た」

二人はその場を去り、作戦・準備を始める一方、残った冥琳は一刀へずつと視線を送っていた。その視線に少し戸惑う一刀

「な、なに冥琳？俺なんか変なこと言った？」

「いや、ただ雪蓮は本当に良い拾い物をしたな、と」

「俺が？」

「ああ、すばらしい洞察力だ・・・これからお前の成長が楽しみだよ」

「こっちこそ此処に住ませてくれて感謝してもしきれないよ・・・あのまま荒野に放つたらかしだったら助からなかったし・・・それに・・・」

「それに？」

「それに、なんだ？」と尋ねる冥琳。一刀は少し照れた表情で――

「本当に家族みたいに接してくれてうれしいんだ。前の世界では少し人付き合いが辛かった事があったからね。ここでは全然辛くないんだ。そういう気分にならないよ。本当にありがとう、冥琳」

一刀は自分の幸せを思いつきりの笑顔で表す

「ふふ、やはり良い笑顔をするな北郷。今は乱世に入り、人が死ぬ時期だ・・・お前はそういう環境にいる我々が安心し、安らぐような笑顔を向けてくれる。今の世の中でこれほど嬉しい贈り物なぞ無い」

「冥琳・・・」

「お前が前に居た世界でどういう辛い経験があったのか知らん。だがお前はもう私を含め、我々孫呉が認めた大切な『家族』だ。これから孫呉の一員、そして私の真名を預けた『友』として、我らの傍で支えてくれ」

そう一刀に伝え、冥琳は軍の準備をする為その場を去った。去り際に顔が少々赤かったのは一刀に見えなかった。一刀は冥琳が言ってくれた言葉を何度も噛み締めた・・・

『我々孫呉が認めた大切な「家族」だ』

嬉しかった・・・
大切だと言ってくれたこと・・・

認めたと言ってくれたこと・・・
家族だと言ってくれたこと・・・

一刀はその一句一句大事にし、覚悟を決めた

「ありがとう冥琳、本当にこの世界に来て最初に雪蓮達、呉のみんなに会えたことを幸せに思う。もう出し惜しみはしない。自分の持つ全ての『力』を使い、君達を支えるよ」

前の世界、人付き合いが苦手な数人しか本当に心を許したことがなかった一刀・・・知らない世界に送り込まれ、そのごく僅かな大切な人達から引き離され、一人ぼっちになった一刀に注がれたのは、孫呉の皆から『絆』・『信頼』・『友』・・・そして『家族』という新たな『光』だった・・・

第04章 く軍議に参加！く（後書き）

自分で読んでて・・・うーんもっと国語力がほしいですね。

でも！楽しくがんばってます。

少しでも興味をもっていただけたら、どうかコメントお願いします

第05章 く戦での出来事 Part1く（前書き）

久しぶりです。ちょっと最近忙しくてパソコンに乗ることさえできませんでした（泣

パソコン中毒になってしまいましたね

第05章 〽戦での出来事 Part1〽

袁術の下、孫呉は着々と黄巾党討伐をしたい。他国の諸侯も同時に同じ活動をし、己自身の功績を上げ頭角を現した。許昌に本拠地を置く曹操、袁術の従姉の袁紹、幽州で活躍する公孫？、この乱世に乗り義勇軍を募り、連戦連勝している劉備等、その勢いは後を絶えない。

諸侯達の活躍のおかげで黄巾党の勢いも衰え、そんな時に袁術からの黄巾党本隊討伐命令が下った・・・

冀州付近の荒地

一刀はやつと慣れ始めた乗馬に苦戦しながら孫呉の将達と行軍していた

「しつかしまあ、袁術には困ったね・・・確か黄巾党本隊って20〽30万でしょ？それを雪蓮達で叩かないといけないなんて・・・大丈夫？」

「大丈夫よ。私が負ける想像できる？」

「・・・難しいね」

「それじゃ大丈夫よ」それに、数の差だったら心配しないでいいわ」「え？」

「今回は私たちだけじゃないってことよ」

雪蓮はそう言つて、続ける

「明命の情報によると、どうやら黄巾党本隊討伐の命を受けたのは私達だけじゃなく、他の諸侯達も勅命が来たみたい」

「他の諸侯？曹操とか劉備とか？」

「そゝそしてその他諸侯もいるでしょう。ま、自分達も功績が欲しいから、協力はずせす各々の計画で行動するでしょうね。それに・・・」

「それに？」

雪蓮は一刀へ振り向き、笑顔で――

「今回は私達の本拠地、建業からの兵達を沢山呼び出したから、かなり戦力が上がるわ」

「へえ、そうだったんだ。それはすごいね」

「まあ、独立の時まで建業の兵達は使いたくなかったけど・・・あ、それとね一刀？その兵達を連れてきてくれるのは私の妹よ。ちよつとおテンバだけど、とってもいい子だから仲良くしてあげてね。もうすぐ合流すると思うから」

「雪蓮の妹っていうと・・・孫尚香、だっけ？」

「あれ？一刀に教えたっけ？」

「ううん。まあ、天の知識ってことで」

「ふうん？まあ、そういうことにしておくわ」

それから他愛の無い話をしながら孫尚香と合流する場所まで向かった。雪蓮達が先に到着したらしく、彼女の妹を待つことになった。一刻程経過した後、前方から大軍が行軍してきたのが見え、旗を見るに『孫』という旗が立っていた。軍のお出迎えは姉の雪蓮、蓮華、一刀になった。すると、向こうの軍から虎に跨ってこちらへと走り向かっている女の子が――

虎って……うん、この世界何でもありだね。うん

この常識外れた世界であまり驚かなくなった一刀……自分がこの世界に慣れつつある事実には複雑な思いを感じながらも、こちらへ向かってくる女の子を見る

そこには雪蓮に似た桃色の髪をリボンのように結び、オヘソ丸出しの上着にとてもかわいらしいスカートを着ている女の子がいた

「おねえーちゃ――ん！――！」

と叫びながら、その女の子は雪蓮に勢いよく抱きついた

「久しぶり、シャオ。ここまで兵を連れてきてくれてありがとね。いい子にしてた？」

「うん♪久しぶりにお姉ちゃん達に会えるからシャオ嬉しくてはりきっちゃったよ！」

「私もよ。シャオ、紹介するわね、孫呉の為に協力してくれている天の御遣い北郷一刀よ」

早速一刀を紹介する雪蓮。孫尚香ことシャオは一刀へ振り向き、全身品定めされているような感じで一刀をジロジロと見つめる。多少居心地が悪かったが、お互いまったく知らない・・・『天の御遣い』だなんて胡散臭い紹介をされたのでしょうがないと思い、我慢する

「貴方が天の御遣い？」

「一応そう呼ばれてるかな？でもそれは肩書きだけだから・・・北郷か一刀って呼んでくれたら嬉しいな。よろしく尚香ちゃん」

「ふーん？分かったわ。シャオの名は孫尚香！そしてこの子が私の友達で虎の——周々？」

途端、シャオの隣からさつき乗っていた虎が一刀へと歩みだし、一刀の目の前で止まり、じっと一刀の事を見つめる

「どしたの周々？貴方も天の御遣に興味あるの？あ、北郷・・・さんだっけ？手を迂闊に出さないでね。周々は私以外に触れられるのは嫌いだから」

「・・・・・・・・・・（じー）」

「ねえ周々、さっきからそんなに静かになっちゃって・・・本当にどうしちゃったの？」

「・・・・・・・・・・・・・ガウ！！！！」

「——っ！？うわっ！」

突然、周々は一刀へ襲い掛かった

シャオ「周々！」

雪蓮・蓮華「一刀！」

尚香は周々の行動に混乱し、雪蓮・蓮華は一刀を助けるために駆け寄った・・・

「ぷっ、あははは、はは！くすぐりたい！くすぐりたいよ！」
「くすぐる？」

そこで聴こえたのは叫び声でもなんでもない、ただの笑い声だった。
よく見ると、周々は上に跨り一刀の顔をペロペロと舐めまくっていた

「ぐるるるる」

「あははは！わかった！わかったからもう顔」——ぶっ！だ、だからもう舐めな——ぶはっ——ちよっと！聞いている！？」
「がう」

虎だが、あえて二度言うが・・・虎だが・・・もう威圧感も糞も無い様な感じで一刀とじゃれあっていた。孫姉妹の3人はこの光景を見て、口が塞がらないくらい放心していた・・・そして最初に我に戻った雪蓮が話した

「ねえ蓮華？あなた、周々とここまで初対面で仲良くできた？」
「無理でした。シャオの姉ということである程度懐いてくれましたが、初対面の時は触れさせてくれませんでした」
「・・・私もそうだったわ。でも一刀にはいきなり初対面でここまです・・・何が気に入ったのかしら？」

「おそらく、彼の『氣』だと思います・・・」
「氣？」

蓮華は以前一刀が瞑想中、色んな動物が彼に留まってきたのを目撃した時のことを雪蓮に説明した

「・・・と、いう訳です」

「へえ、そんなところが・・・一刀の『氣』は特殊なのかしら」

二人は一刀と周々のじゃれあいを見守る中、シャオは一刀を興味津々そうに見つめていた・・・

満足したのか、周々は一刀から離れ再び小蓮の元へ戻る。一刀は遊びで乱れた服を整え、シャオの元へ行き――

「すごい良い子だね、周々って子。とりあえず、長旅お疲れ様。これからよろしくね、尚香ちゃんどわあああ!？」

自己紹介が終わる前に、孫尚香が一刀にタックル並みのハグをしてきた。その勢いに倒れかけるものの、なんとか男の意地で留まる

「しよ、尚香ちゃん？」

「気に入ったわ！周々があそこまで懐くなんて初めてよ」それに良い男だし、これからもよろしくね！シャオの真名は小蓮、シャオって呼んでね？か・ず・と」

「はは、こつちもよろしく、シャオ（さすが、雪蓮の妹だな）」

色っぽいウィンクをしながら満面の笑みを浮かべ、抱きしめながら自己紹介をする。一刀はそれに答えシャオの頭を撫でると、シャオはすごい幸せそうな表情になり、顔を一刀のお腹にうずめる

「えへへ、一刀ってなんか安心するー」まるで母様に包まれてるように安・・・心・・・で・・・き・・・」

「「シャオ!？」」

突然シャオが喋らなくなり、心配する姉二人。一刀は人差し指を唇までもっていき、再びシャオに顔を向ける

「くう・・・くう・・・」

幸せの笑みを浮かべ、規則的な寝息をしている妹の姿があった

「ここまであの大勢の人を指揮して行軍したんだ。きっと疲れたんだろう。明日から戦だし、少し寝かせてあげよう」

そう言うと、一刀は小蓮を抱きかかえ、近くの日幕まで連れて行く。周々はその後を追い、一刀の隣まで走っていった

一方、取り残された二人は・・・

「姉様、シャオがあんな表情するなんていつ以来でしょうか」
「母様が亡くなって以来・・・かな。笑顔は見せるけど、あそこまですぐに顔は見てないわ。あの子にあの笑顔がこつと早く戻るなんて・・・」

大切な妹の幸せそうな顔を見て心底嬉しかった二人だった

翌日

他の呉の将と着々と準備を終え、黄巾党討伐直前に最後の軍議をした。冥琳が始める――

「さて、今回の敵は黄巾党の本隊。数は大軍だが、策も何も無い烏合の衆。他の諸侯の者達も功績が欲しいため協力は望めん。だから我々が一番早く首謀者張角を捕らえなければならん」

「烏合の衆だつたら突撃して根絶やしにすればいいじゃない」

「落ち着け雪蓮、我々は損害をあまり出してはいけないわ。だから、敵陣の後方に火を放ち、そこから逃げ出してくる敵を殲滅させる・・・という策はどうかしら？」

「・・・いいわね、真つ赤な炎って好きよ」

ゾクゾクするような笑みを浮かべる雪蓮

「さて、この作戦には、雪蓮が中央で待機。敵をあぶりだした所に両側から横撃。左翼は蓮華様と穏で率い、右翼は祭殿と亜莎で率いる。私と北郷、そして小蓮様は本陣で待機しつつ、各隊に指示を出す。思春と明命は敵陣内部へ侵入。燃やせるものすべてに火を放て。」

お前達二人がこの戦の勝利の鍵だ、心して挑め」

思春・明命「御意」

祭「心得た」

穩「はい」

蓮「わかったわ」

亜「は、はひ！」

雪「了解」

一刀「……………」

一刀だけ、表情が固まっていた。それに気づいた雪蓮は一刀に話しかける

「一刀、やっぱりまだ辛い？」

「雪蓮……」

「人が死ぬ、殺されるってまだ耐えられない？」

「……正直怖いし、慣れたくもない……今まで小さい戦に雪蓮達が連れてってくれて、何もせずに見ておけつて言っただけ、その度に何度も吐いて、何度も悪夢見て……死んだほうがマシだって思い始めた」

「一刀……」

その言葉に皆は理解する……

一刀は決して人を殺めてはいけない人なのだと・・・

雪蓮はそんな一刀を勧誘し、殺しをする手伝いをさせてる事を少し後悔した。雪蓮が落ち込みそうになった瞬間、一刀が続ける

「でも・・・今は少し大丈夫になったかな？この世界はこれが常識だっていうことを認めないといけないしね・・・これは、やっぱり慣れないと駄目だと思う。それに、ここに居る皆を守る為に戦うって思えば、少しは心が晴れるから・・・なんとかやるよ」

一刀そう言うと、自分が大丈夫だと思わせるために笑顔を作る。偽りの笑顔なのは皆わかっていたが、一刀の頑張りを察し何も言わなかった。そして、命令を聞くために将達は再び冥琳へと視線を送る・・・

「それでは、戦を開始する。皆、各持ち場で待機しろ！」

「「御意！」」

こうして、黄巾党最後の戦が始まった・・・

冥琳の策が成功し、今は火の海になっている敵陣営・・・

それに乗じて雪蓮達と他の諸侯達が黄巾党を殲滅。これでもう本陣への危険は無いだろうと思い、冥琳は次の命令をだす――

「よし、そろそろ頃合だ。私は雪蓮達と合流する。北郷、お前も一緒にくるか？」

「あ、ああ。皆が無事か心配だしね・・・」

「雪蓮の事だ、きつと無傷で大勝だろう。さ、行くぞ。小蓮様もご同行お願いします」

「うん」わかった。周々！本陣をちゃんと守っててよ！

「ガウ！！」

「でも、もし敵の残党がきたら・・・」

「北郷、それはいらない心配だ。敵はほぼ壊滅。そしてここに残す100人は呉の中でも一番の猛者達だ。ちよつとやそこらの賊の千や2千に負けんよ」

「そうなんだ、じゃあ行こう。雪蓮達を迎えに・・・」

「ああ、お前達！本陣をしっかりと頼むぞ！」

「「「「はっ！」「」「ガウ！」」」」

そうして、一刀、冥琳、小蓮は敵陣営へむかった・・・

3人が敵本拠地へ向かってしばらく経った後、本拠地では残党が来るか見張りながら兵達は談話していた――

「なあ、お前この間御遣い様と一緒に食事してたよな？」

「ん？あ、ああ。あれは北郷様と一緒に警邏に行ったときにな。終わったら食事を奢ってもらったんだ」

「北郷様って・・・お前いつからそんなに親しくなったんだ？」

「いや、御遣い様って呼んだら、『北郷か一刀でお願い』って頼まれたんだ。どうやら『御遣い』って呼ばれるのを嫌がっているらしい」

「そうなんだ・・・」

「ああ・・・最初はどんな人かずっと考えてたけど、本当にあの人が御遣い様でよかったよ」

『どうして？』と兵の一人が問います。するともう一人が顔を輝かせ、まるで自分の事の様に自慢します――

「孫策様とかと共に行動し、俺達一兵卒よりも権限がかなり上の方が一緒に食事をして、時には一緒に笑い、肩を組み、もう友達同士がするような振る舞いで接してくれるんだ。あれほど権力に興味なく、ただ単に俺達のことを想ってくれるお方なんてあったことがない」

「そうか・・・さすが天の御遣い様だな」

「ああ、それに――ん？」

「・・・・がるるるる」

再び話そうとした時、周々が二人の前を通りすぎ、敵本陣のほうへ向かい牙をだす。そっちから本陣へ知らない3人組が駆け寄ってきた

「あゝくそつ、惨敗だったな・・・黄巾党はもう終わりだ、また一から始めるか」

「そうだな、他の賊に入って、また楽しい放題しようぜ」

「ちょ、二人とも、こっちって確か敵本陣じゃないですか？」

「ああ？んなの知らねえよ、ただがむしやらに逃げて来たんだからよ」

「仮にそうだとしても、ほとんどが黄巾党の残兵を追ってるだろう。俺たち3人だったらちよつとやそこらの官軍には負けはせん」

「だな・・・あの將軍どもは化け物並みだが、俺たちだって捨てたもんじゃねえしな。ハハハハ」

3人は黄色い布を体に纏い、話からして黄巾党の生き残りだろう。さつきまで話していた兵2人が彼らの前を立ちふさがる

「止まれ！お前達、黄巾党の生き残りか？」

その声に応じたのは、長身でさつきから態度がでかいような口調をしている男

「ああん？だとしたらどうすんだよ？」

「ここは呉の本陣。お前達を通すわけには行かない。とっとと他へ消えろ」

「は！随分と気が強えなお前。断る・・・と言ったら？」

「言うことを聞かないのなら、こつちも力ずくでお前達を排除する！黄巾党を殲滅する命もあるしな」

その言葉に、本陣に残った兵が全員集まってきた

「はは、やる気まんまんじゃねえか」

「ちよつと、お前のその喧嘩腰、止めてくださいよう」

「・・・ざつと100人位か」

小柄で弱気そうな男と大柄な男が後を続く・・・

「関係ねえよ！それにさっきから負けてんだ、憂さ晴らしにこいつら殺つてもいいじゃねえか！」

「俺も参加させてもらおう。最近負け戦の続きで怒りが溜まってるからな」

「・・・はあ、まあ負けばつかしは確かに嫌ですね・・・」

3人は一斉に鞘から剣を出す。それを見た兵達は己の剣を取り出し構え、周々は襲う臨戦態勢に入った

「・・・こつちは100人もいるんだ。死にたいのか？」

「ごちゃごちゃうるせえぞ！早く殺ろうぜ！」

「忠告はした。全員！この3人をひっ捕らえろ！」

「「「「「おおおおお！」「」「」「がおおおおおおん！」」

100人＋1匹が一斉に3人に襲い掛かる・・・

「へ、おもしれえ！俺達がそこの黄巾党の生き残りと同じだと思ふなよ！」

「度胸は買うが・・・」

「あなた方では私達に勝てません！」

こうして、一刀が居ない間に本陣で戦いが発生した――

雪蓮達と無事合流した一刀たちは、本陣へ向かって歩いていた。雪蓮は納得いかない表情で一刀の隣を歩いていた

「ああ！！！！くやしい！」

「そんなに悔しい？雪蓮」

「悔しいわよ！張角見つからなかったし、おいしいところ全部曹操の所に持つていかれるし・・・」

「まあ、今回は曹操達に譲ってあげよう。雪蓮には絶対功績を上げる機会があるから」

「ぶゝ、それでも嫌なの！負けた感じがするの！悔しいのよゝ」

まるで駄々っ子のように手をパタパタさせて暴れる雪蓮。少女だったら可愛い仕草だが大の大人がすると苦笑いしか出来ない。一刀はとりあえず雪蓮の肩に手を置き

「まあでも・・・本当に皆が無事でよかったよ。いつも戦の度に思うけど、俺は雪蓮達に何かあったら壊れそうだからね。いつも戻ってくる度にホッとするんだ。功績もいいけど、あまり無茶しないですよ?」

「一刀・・・」

ちよつと涙目で笑顔を作る。それを見た雪蓮は一刀はどれだけ心配してたか、どれだけ雪蓮達のことを想っているのか容易に理解できた。雪蓮はいきなり一刀を自分の胸元に抱き寄せた

「ふえ、ふえれん? (しえ、雪蓮?)」

「ああん、もう! 可愛い顔するんだから! でも大丈夫よ! 私たちは死なないって! でも心配してくれてありがとう! (ギュー~~~~~)」

「つと。ふふ、役得ね」

雪蓮の抱擁にジタバタする一刀だが、雪蓮は一刀の先程の想いが嬉しいらしく、一向に離す気はなかった。次第に、一刀の動きが少しずつへり、腕がだら〜んつとぶら下がり始めたところ、見るに見かねた冥琳が一刀へ助け舟をだす

「雪蓮、その位にしなさい。北郷が死にそうよ」

「え? ああ! ごめんごめん一刀!」

「・・・・・・・・・・はっ！ぜえ、ぜえ、く、苦しかった」

「私の胸で死ねるなんて、幸せね」

「洒落にならんわ！そんなんで今は死にたくない！」

顔を真っ赤にしながら雪蓮を睨みながら言う一刀・・・・全っ然怖くありません

「・・・・『今は』？てことはいつかは死ぬときそうやって欲しいってことね？」

「なあ！？ち、違う！それは言葉のあやというやつで・・・・べ、別に雪蓮の胸が魅力的じゃないって言うてるわけじゃないけど・・・・今の俺はやるべきことがあるわけで・・・・でも・・・・ブツブツ」

「あはははは！真っ赤になっちゃって！ああん！もう！可愛いわね一刀」

「うぷ！」

再びイン雪蓮の胸元。他の将達は雪蓮と一刀に呆れながらも見守っていた。そんな感じでゆっくりと本陣へ向かっていたところ、この中で一番目の良い祭が、本陣から誰かが走ってくるのを見かけた

「ん？策殿、本陣から誰かきたようじゃ」

「え？何かあったのかな？（じたばた）あ、ああごめん一刀」

「ぶはっ！本日二度目のひい爺ちゃんのご対面だったよ」

「して、あやつの表情からして尋常じゃないのお」

祭の言葉にいち早く反応したのは一刀と小蓮

「もしかして、本陣で何かあったのか!？」

「そこにはシャオの周々もいるのよ!」

「落ち着きなさいシャオ!一刀!彼に聞けば判るわ。皆!急いであの兵に向かって走るわよ!」

「「はい!」」

将達は後ろの兵を残して先に駆け出す。次第に本陣から走ってきた兵と近くなり、彼が全身血まみれになっていることに気づいた・・・彼が倒れそうになった所、一刀が追いつき抱きかかえる

「お、おい!!大丈夫か!？」

「・・・み、御遣い様?」

「ああ、どうした?」

「ほ、本陣が黄巾党の残兵にやられてます!」

「「「なっ!?!」」」

「「「!!!!!!」」」

「っ!?!周々!」

「一刀!?!シャオ!?!」

一刀は兵の言葉を聞いた途端本陣へ走り出した。それに続き周々が心配だったのか、小蓮も走りだした。それに対して雪蓮と冥琳はシヨックを受け、動けないままだった。黄巾党は殆ど敵本拠地で壊滅・
・ 呉の本陣へ乗り込めるとしても人数は少ないはず。さらに本陣へ残したのは呉の中でも選りすぐれた兵達。ちよつとやそこの賊には必ず負けないと思っていたからだ。冥琳はその兵に問いだす

「ばかな！お前達なら並大抵の賊共には負けないだろう！？」

「は、そ、それが我々が小物のように扱われるほどの賊でして・・・我々には手に負えません。それで私は上官から將軍様たちをお呼びするよう頼まれたのです」

「ば、ばかな・・・」

「ど、どうか、早く他の仲間たちを援助お願い申し上げます！」

兵は深く深く土下座をして雪蓮達に悲願する。この者も、仲間想いの良い兵士だ。戦わず、仲間を置いて将達を呼びにいった役目を負ったのが悔しいのだろう。彼の目からは涙がポロポロと落ち、何度も何度も『お願いします』といってきた。それを見て雪蓮はすぐに行動を取る

「穩！あなたはこの兵に付き添ってあげなさい！他のみんなは全速力で本陣へ戻るわよ！」

「」「」「御意！」「」

穩を除く他の将達は全力で本陣へ向かう・・・

「な、なんだよ・・・これ」

いち早く走り出した一刀は一番に本陣へ着いた。そこで見かけたのは深い傷を負い、もう助からないであろう、瀕死状態の兵達。そして、腕やら足やら斬り取られ、痛さで断末魔のような叫びをする者まさに、一刀にとっては地獄のような光景だった・・・

「だ、誰がこんな酷いことを・・・」

・
その顔には、今までの一刀なら想像できないほどの怒りが見えた・・・

VIEW： 兵

強い・・・なんでこんなに強い奴が賊なんてしているんだ？もうこの3人に何人孫家の兵達が斬り倒されただろう。残された戦える兵はもう俺一人・・・

「はあ、はあ、はあ、ぐつ、はあ、はあ」

「はっはははは！お前結構やるな、がんばるじゃねえか」

「はあ、はあ、ぞ、賊に遅れなど、と、取らん」

「威勢がいいねえ。別のところであつたら気が合つたかも知れねえな」

気が合つたと！人を斬る度に喜ぶ声を出してた奴などと気が合つものか！俺は呉の皆が大好きだ！絶対に守って見せる！刺し違えてもこの3人だけは・・・この3人だけは倒してみせる！

「へえ、覚悟した面だな。ま、どうせ俺には当たんねえよ」

「ほざけ！この一撃ぐらいは入れてやる！はああああ！！！！！！」

「ああ、まあな？俺だけだったらいいけどな？他に二人居ること忘れてねえか？」

「なっ！（ガキンッ）」

急に死角から俺の剣がさっきの大柄な奴に弾かれてしまった。丸腰になった俺に、目の相手が容赦なく斬りかかろうとする

「くたばりな」

容赦なく降りかかる剣・・・

皆すまない・・・俺だけでは仇を討てなかった。まだ息のある皆、もうじき孫策様たちが戻るだろう。早く傷を癒して、また呉の為に尽くしてくれ

そしてもう此処で戦死した友たちよ・・・今からそっちに逝く。一緒にまた酒でも飲もう

もう助からないだろうと察した俺は、目を閉じて、死を覚悟した・・・

さらばだ・・・

VIEW
END

ザ
シ
ユ

第05章 く戦での出来事 Part1 (後書き)

コメント、指摘、なんでもお待ちしております。よりよい小説にしたいので、何か疑問や『こうしたらいいよ』みたいなものがあれば嬉しいです。

興味を少しでもお持ちいただけたら、嬉しいです♪
では！コメントまってまーす

第05章 く戦での出来事 Part2 (前書き)

どうも、Lynxです。では、パート2エンジョイしてください

第05章 く戦での出来事 Part2く

隊長格の兵は最後まで足掻いたが、疲労の末、剣を弾かれる

「くたばりな」

敵の一人が剣を振りかざす。男は死を受け入れ、目を閉じて最後の
一撃を待った

ザシュ――

生々しい音が響き渡る。男は待つが一向に痛みを感じない。何が起
きたのか解らず、男はそつと目を開け、驚愕する――

そこには胸から剣が突き出ている相手と・・・

その剣を背後から突き刺し、涙を流している天の御遣いがいた――

——少し前——

VIEW： 一刀

「な、なんだよ、これ・・・」

見渡す限り血、血、血——

ひ、酷い有様だ・・・確か冥琳は呉の中でもトップの兵士達を本陣で待機させたはずだ。それは俺自身も保証できた。将達には及ばないけど、充分強い『氣』を感じた。それなのに今日の前に見えるのは傷ついた兵達、すでに絶命した兵達・・・呻き声と叫び声が本陣を埋め尽くす・・・

「う、うぶ・・・っ、ぐっ」

吐きたい・・・でも必死にその吐き気をなんとか気力で抑える。そんな暇は無いんだ・・・今は治せる人は治さないと！

・・・・・・キン

っ！？なんだ今の音は？・・・あっ！あそこに兵の一人が3人と戦ってる！・・・強い。黄巾党でここまで強い人がいるなんて・・・このままじゃ殺される！助けないと！

でもどうやって助ける？その場を凌いただけで、敵は普通に追ってくるだろう。どうやったらこれ以上の殺し合いを防げる？

殺す・・・

っ・・・やっぱりそれしかないのか？しかし、俺に人を殺せるのか？爺ちゃんが言ってた・・・常に冷静でいろっ。でも殺して冷静にいられるかよ！でもだからって俺の仲間達を見殺しにするのか！？

殺せ
・
・
・
・
・

しつかりしろ北郷一刀！この時代、人を殺めるのが普通なぐらいに争いがある！覚悟を決めるんだ！！

これから自分の仲間達が戦争で死んでいくだろう！
その為に俺も人を殺すことになるだろう！

悲しめ！

泣け！

悔やめ！

でもそれ以上に乗り越えろ！自分の手の届く限り仲間を・・・

守れ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

V
I
E
W

E
N
D

「み、御遣い様！」

その声に刺された敵も苦しみながら後ろへ振り向く。そして彼は見た・・・泣き顔の男の顔を・・・それが彼が生涯で最後に見た光景だった・・・（オツ）

一刀が敵から剣を引き抜くと、心臓を貫かれた敵はすぐに屍と化した。そして一刀はすぐに兵のところへ跪き伝える

「大丈夫か？走れる？」

「御遣い様・・・は、はい、斬り口はありますが、致命傷は受けておりません」

「そうか・・・良かった・・・それじゃここは俺に任せて、すぐにここから離れてくれ」

「え！？ま、まだ私も戦えます！」

「駄目だ、もう君は充分に戦った。だからここは俺に任せてくれ。君は他の怪我人を助けてやってくれ・・・頼む」

「御遣い様・・・はっ！後はお願い致します！」

一刀の真剣な頼みに負け、兵はすぐその場を立ち去る。一刀は他の2人の敵の方へ向かう。一方、敵の2人は突然あらわれた一刀に驚きを隠せず、その上いきなり仲間の一人が殺され、ショックで動けなかった。その二人に一刀は近づき、涙を流しながら言った――

「君達は俺の大切な仲間たちを傷つけた。それは俺自身が汚されようと、傷つけられようと、どんなに苦しめられようと、どんな苦痛よりも胸が締め付けられる。そんな事をする君たちは、俺が許さない！」

一刀の言葉にやっと我に返った大柄の男はすぐに武器を構える

「後ろから俺の仲間を刺すとは、卑怯なやつだ……お前は俺が殺す！」

「そんなに殺して、楽しいか？」

以外な言葉だったのか少し目を開く大柄な男……だが次第に狂った笑みを浮かべ、一刀に語る

「ああ、自分の好き勝手に行動でき、人を殺せば好きなものが手に入る。人の不幸は蜜の味と言うだろう？この剣で人を斬る度に見たさ……絶望に染まる表情……死の恐怖を抱く表情……全て癖になってしまったな」

大声で笑い始める大柄な男……一刀は――

「そうか……じゃあもう何も聞かない」

「さあ！お前も俺に絶望の顔を見せてくれ！うおおおおおお！」

大男は一刀へ突進する。一方一刀は持っていた剣を捨て、少し前かがみになり、両腕を左右に広く後方へ伸ばし、構えを取る

男が剣を一刀に振りかざす瞬間、一刀は構えが更に前屈みになり――

「虎竜乱舞、虎の型　・　“瞬き”」

その瞬間一刀の姿は消え、もう一人の敵の男も含め、他に人がその場にいたなら誰もが信じられない光景を見ただろう――

一刀へ目掛けて振りかざした男の剣が、一刀が消えた瞬間に腕が曲がり……

己の胸を貫いた同時に、一刀は男の背後に現れたのだから――

次第に痛みを感じ始めた男は自身を刺したことに気づく。そして何

が起きたのか判らず、不可解のまま倒れだす

「お、俺・・・じぶ・・・ん、をさ・・・し・・・？どう、し・・・
・て」

「君が何人も殺したその自慢の剣の切れ味、自分で確かめな・・・」

男は絶命し、一刀はもう一人がいた方向へ振り向く。さっきまでその場にいた敵の姿はなかった――

しかし、何か感じ取ったのか、一刀は彼を追う事はなかった――

――本陣から少し離れた場所――

残り最後の一人は、一刀が姿を消し、男が自分を刺した瞬間に逃げ出していた。顔は恐怖に怯え、冷や汗を流し、ただひたすら逃げた

「あ、あんな人は私には到底、か、適わない。こ、こっこ、こつ、こつはさっさと離れるのがーb『死ぬ、下衆が』——がっ!？」

突然その男の腹から剣が突き出ていた・・・

南海霸王——雪蓮の剣だった。雪蓮は殺気を込め男を睨む

「急所はとりあえず外してあげたわ。正直に答えなさい・・・さもないと、今すぐこの南海霸王をこのまま脳天まで動かす」

少しだけ剣先をずらし、本気だと示す。男は叫び苦しみながらも、首を縦に振る。すると冥琳が問いだす

「首を縦か横に振るだけで返事しろ。わかったな？」

（コク）「

「よし、お前は黄巾党の生き残りだな？」

（コク）「

「さっき、我ら呉の本陣から走ってきたな？」

（コク）「

「そこには虎と呉の兵士達がいたな？」

・・・（コク）「

「お前は、そいつらを、どうした？」

「・・・・・・・・・・」

「殺したのか？」

「・・・・・・・・（コク）」

みるみる呉の将達の顔が怒りに染まっていく。だが、少しここより離れた場所で、雪蓮達が追いついた小蓮だけは、まだ心配の表情をしていた。それを見た冥琳は、更に問いだす――

「そこに、虎もいたな？」

「（コク）」

「そいつは、殺したのか？」

「・・・・（フルフル）」

「生きているのか！？」

「・・・・（フルフル）」

「殺していないが生きていない・・・判らないのか？」

「（コク）」

「蓮華様、思春・・・小蓮様お連れし、周々を探す手伝いを」

「わかったわ」「御意」「周々！！！！」

3人はすぐに本陣へ駆け出した。そして雪蓮は剣を男から抜き出し、剣を一振りして血を飛ばす。男は苦しみ、悶えながら何とか生にしがみつく

「しょ、しょうじ・・・ごほっ、きに、はなし・・・たんだ。み、見逃して、くれ」

「黙れ。お前は命乞いをした者達を殺し、己の欲望を満たしていた

賊だ」

「・・・・・・・・・・」

「そんな獣じみたお前にそんな権利があるとしても言うのか？」

「ヒッ!？」

「せめて正直に答えた情けとして、楽に死なせてあげる」

男の言葉を待つこともなく、雪蓮は一瞬で彼の首を斬った

「皆!本陣へ早く戻るわよ!」

「「「御意っ」「」」

雪蓮達が本陣へ駆け付き、最初に見かけたのは兵達の屍、もしくは痛みで苦しんでいる呉の兵達だった。その隅で、先程蓮華と思春をつれていた小蓮を目撃する

「シャオ!」

すぐ妹の下へ駆けつけた雪蓮は、妹が大切にしていた周々が血だら

けで横たわっていることに気づく。血まみれになることなんて気にせず、周々を抱き続け、顔をぐしゃぐしゃにして泣き叫んでいる小蓮がいた。かろつじて息はまだあるらしい。だがもう白目を剥いていてシャオの言葉にも反応できない。

「嫌だよ周々！こつち見てよ！死なないで！嫌だよ！嫌だよお！！」

「シャオ・・・」

「我々が見つけたとき、既にこの状態でした・・・」

「蓮華」

「周々はもう・・・」

「俺が着いたその時には既にやられていたよ」
「一刀！！」

そんな時一刀が現れた。彼の天の御遣いを示す制服と顔は所々血が付着してるのが見える。一刀の姿に雪蓮は驚く

「ど、どうしたのその格好！？」
「うん？ああ、問題ないよ、黄巾党の生き残りを退治しただけ。今し方終わったんだ。これは返り血だけで、俺に傷は無いよ」
「・・・殺ったの？」

「ああ、でも大丈夫。それよりも——」

一刀は周々へ歩み寄り、小蓮の隣に跪き、彼女の頭に手を置き、笑顔でゆっくりと撫でる

「ぐすっ・・・かず、と？一刀！」

一刀と気づいた途端、シャオは強く抱きつき泣きじゃくる

「シャオ・・・」

「周々が！ぐすっ・・・周々が死んじやうよお」

「大丈夫・・・もう大丈夫だよ。俺が必ず治してあげる」

「ぐすっ・・・で、でももうこんな風に——」

「大丈夫、俺を信じて。少し離れてくれるかな？」

「ひっく・・・う、うん。お願い一刀！周々を治して！」

シャオが離れ、一刀が変わりに周々に手を添える。そこに他の将達をと合流した雪蓮が近づき一刀へ話しかける

「一刀、もう無理よ。貴方もバカではない」

「雪蓮・・・」

「こんなに苦しむのなら、むしろこちらで楽にしてあげる方がいい

わ」

「・・・俺は皆を守る。その為には、俺はもう覚悟しないとイケないんだ」

「覚悟？何の？」

「自分に偽りなく生きていく覚悟だよ・・・」

「????どういうこと——っ!」

途端、一刀の体中が蒼色に光り、その光が周々も包む・・・雪蓮達はその光景に息を呑み、ただその光に見惚れることしか出来なかった

「（綺麗・・・それに暖かい・・・これは氣?いや、そんなんじゃないわ。いったい何なの?）」

「あ!姉様!!周々の傷が!」

「えっ!?!」

雪蓮は言葉をなくす

周々の体の傷がみるみる塞がっていき、

周々からは安定した呼吸が見え始めてた

「き、傷か塞がった・・・?」

「スーっ、スーッ・・・」

冥琳の言葉に応えるように、周々から規則正しい寝息が聴こえる

一刀が立ち上がり、小蓮の下へ行き彼女の頭にポンツと手を置き「もう大丈夫だよ」と言った後、その場を立ち去った。目の前で起きた現象に驚き過ぎて放心状態だった小蓮が我に戻り

「ああ、あああああああ！！！！周々！周々！よかった、よかったよお」

その場で地面に崩れ落ち、嬉し涙を流す

一方、他の将達は今起きた事がまだ理解できず、石のように固まっていた――

暫くすると雪蓮は我に戻り――

「・・・ハッ！？一刀っ！？一刀はどこ？」
「策殿、あちらじゃ」

祭が手を指した方へ皆目を向ける。一刀はそこから少し離れた場所、本陣に残り負傷した精鋭達の下にいた。そして一刀は一人一人兵達の傍へ行き、

さっきの蒼色の光を纏い、傷を治していく

その光景は誰もが見惚れる、

誰もが待ち望んでいた、

天の御遣いそのものの姿だった

第05章 く戦での出来事 Part2 (後書き)

いやあ、やっぱりもつと日本語の表現力がほしいですね。
日本に勉強行きたいなあー

コメントお待ちしております！

第06章 〱一刀、絆を求める〱（前書き）

皆が一刀の能力を見た反応は！？
では、Enjoy！

第06章 一刃、絆を求める

VIEW： 一刃

・ ・ ・ ・ ・ これで治せる人は治せた。でも・ ・ ・ ・

・
いくら覚悟したとはいえ、やっぱりこの『力』を使うのは抵抗あるなあ。治された兵達も、啞然としてるし・ ・ ・ そりゃあ驚くよな。技術が高かった前の世界でもすごい驚かれたのに、1800年以上昔のこの時代の人達から見たら、こんな『力』は非人間的だろう・ ・ ・

ふう、やっぱり小さい頃のトラウマっていうのは中々離れないな・ ・ ・ たぶん及川のような人達も充分にいると思うし、逆に自分達が治って嬉しくなる人も多いと思う。皆もう大人だし、小さい頃と違って大丈夫だと思う

でも、そうじゃなかったら？

逆に恐れられたら？

気持ち悪がれたら？

雪蓮達に気味悪がられたら？

……想像もしたくない。そんなの最悪だ。この大陸で一人ぼっちの俺に居場所をくれた雪蓮達。そんな人達から嫌がられたらマジでヘコむ

でもだからってこの『力』を使わなかったら、余計に人が死に、雪蓮達も悲しみ、何より大切にしていた周々が死んだらシャオから笑顔を奪うようなものだ。そんなのはしたくない。彼女のような子はいつも笑顔でいることが必要なんだ

もう覚悟はした。トラウマなんてどうこう言ってる暇なんてない。

この時代、この『力』が必要な場所がいくらでもあるんだ・・・

どんなことがあると、『天の御遣い』として、雪蓮達を支えてみせる

それでみんなに笑顔が残るのなら・・・

俺の全ての武で敵を排除し・・・

全ての知を持って民を支え・・・

この『力』を持って人を癒そう・・・・・・・・

それが・・・俺のこの世界で住む『覚悟』だ――

一刀 VIEW END

—— 戦後・本陣 ——

本陣を駆け回り、傷ついた兵たちを治療していった一刀はやがて雪蓮達がいる場所へ戻ってきた——

「治せれる人は、全員治せたよ——雪蓮？」

報告が終わった同時に雪蓮が抱きしめてきた

「ど、どうしたんだよ？いきなり・・・」

「・・・ありがとう」

「え？」

「呉の民を救ってくれてありがとう」

「・・・雪蓮はあの『力』を見て、怖がらないのか？気持ち悪いと思わないのか？」

それを聞いた雪蓮は更に抱く力を強め

「あなたは私の大切な妹の笑顔を守ってくれた。その子の大切な周々を救ってくれた。そして孫呉の兵たちを治してくれた。一刀、そんな素晴らしい事をしてくれた貴方に私はなんで怖がらないといけないの？一刀が過去に何を経験してそう思うのか判らないけど、私からしたらその人たちの頭の方が可笑しいと思うわ。呉の民を貴方は守ってくれて、感謝してもしきれない。ありがとう、本当にありがとう」

雪蓮の言葉に一同は頷く。一刀は嬉しさが込み上がり、涙を流す。ありがとう・・・ありがとう・・・と呟きながら、一刀は雪蓮の胸の中で泣き続けた。雪蓮はその間ずっと一刀を抱き、背中を撫で、頭を撫で続けた――

暫くした後――

「あはは、みっともない姿を見せてごめん。でもこの能力を気味悪

がられなかったのが本当に嬉しかったんだ。これからも皆の傍でがんばって呉を支えることを約束するよ」

「もちろんよ」これからもどんな呉の為、そして私の為、支えて貰うわよ」そうよね、冥琳？．．．．．冥琳？」

さつきから黙っていた冥琳へ雪蓮は振り向く。そこには複雑な顔をし、一刀を見つめる冥琳がいた

「北郷。呉の皆を治してくれたのは感謝する。しかし、今後その『人外な力』は使わないで欲しい」

「．．．．え？」

「ちよつと冥琳！あなた何を言っているの！？『人外な力』って酷いわよ！それに何で使っちゃいけないの？民達がもつと生き残れるっていうのに！」

雪蓮が少し怒りだし、冥琳に問いかける

「雪蓮、考えてみなさい。こんな『人外な力』を持った北郷がお前の傍にいて、瀕死状態の兵たちを完治へと一瞬で導く．．．そんな存在が常に孫呉の傍にいと知れたら、他の諸侯からはどう見られると思う？」

「それは天の御遣いが孫呉の前に舞い降りて．．．」

「それだけで終わると思うの？」

「．．．．どうということ？」

「そんな人物が天の御遣いだと知れるのは良い。だが、他の諸侯はこついう『能力』を妖術、妖の類と思う可能性がある。たとえそうだとしなくても、そういう噂を流し、孫呉の民達が『妖が孫呉と共に居る』という状況になる可能性もある」

その言葉に雪蓮は明らかに怒りを表に出す

「そんなの、一刀の性格からして、絶対ありえない！」

「北郷を知っている私達は問題ない。だが、他の諸侯達は北郷という人物は知らない。そういう者達が全員意気投合し、妖の討伐という大義名分でこちらに攻めてきたら完全に不利だ。その上、天子様もその噂を鵜呑みにする可能性もある。天子様から討伐の勅命が来たら、もう手遅れだぞ」

「っ！」

雪蓮は無能ではない。そういう可能性があることさえも考えていた。だが、一刀という優しい人物だから問題がないかと思っていた。それは呉の民の間だけであって、決して他の諸侯が一刀を天の御遣いとして必ず認める訳じゃない。雪蓮個人としては一刀と助けたいが、王として、民を不利に導く行動はしていけない。冥琳の理論的な発言に、他の皆も黙ってしまう。冥琳が更に述べる

「とにかく、そういう不利な状況に孫呉を置きたくない。その為、どんなに呉を民を助けれる『力』があつたとしても、北郷にはその能力を封印してもらわないといかん。そんな不死身の様な力を持っているのは孫呉には脅威とn「不死身じゃないよ」・・・ということだ」

今までずっと黙っていた一刀が冥琳の発言を遮る

「この『力』があるのが厄介だと知っている。それが雪蓮の周りにあつたら悪影響さえあるってこともね。過去に冥琳みたいな考えかたした人がいたから、それ以来この力を使わない方が良いつてずっと思ってた・・・冥琳の言つた通りね」

苦笑いしながら語る一刀

「でも、雪蓮達はこんな『力』を感謝してくれた。認めてくれた。だから誰がなんと言おうと、この『力』は誰がなんと言おうが使う」
「北郷！そうしたら他諸侯がどんな噂を」『守ってみせる！』——
「っ！？」

冥琳が反対しようとした瞬間、一刀が大きな声で叫ぶ

「今日実際にみたんだ！苦しんでる人達を！冥琳、君はそんな人達を放っておけって言うのか！そんなことはさせない！俺が守る！少しでも生きてる人は治して見せる！もう目の前で人が死ぬのは嫌なんだ！だから俺が守ってみせる！俺の全てを持って！今後何があるうと、俺が死なない間は皆を、呉の全てを守る！」

「一刀……」

雪蓮は一刀の言葉に少し涙目になる。冥琳以外の将達も多少目が潤んでいた。どれほど一刀は雪蓮達を大事にしている気持ちが伝わってきたらしい。冥琳だけはまだ不安を拭いきれて無いらしい。彼女はずっと一刀の言葉を待つ

「だから我侭だけど、雪蓮達の傍この『力』を使わせて欲しい。俺は神じゃないし、妖でもない……人間なんだ。不死身じゃないんだ。その証拠に……雪蓮、剣を少しだけ貸してくれる？」

雪蓮は何故話の場に剣が必要なのか理解ができないが、一刀の真剣な眼差しを見て、必要だと判断し．．．自分の剣、南海霸王を鞘から抜き、一刀へ渡す。一刀は「ありがとう」と良い、その剣を取る。再び冥琳に振り向き、剣の持っていない左腕を冥琳に目掛けて上げる．．．その行動に冥琳は少し身構えるが、それはすぐに消えてしまふ

「……いっ！」

少し気合をいれた瞬間、一刀は冥琳へ目掛けて上げた腕を南海霸王で斬りつける

全員「「「「「「「「「
なっ!!!!!!!!!!!!!!」
「「「「「「「「「

その行動に皆が驚愕する。血が噴出し、肉がパツクリと開き、骨まで見えるまで一刀は自分を斬ったからだ。

冥琳もその行動に驚愕し、混乱と共に固まっている
一刀はフウッと息を吐き出し、剣を雪蓮に渡し、衝撃的事実を述べる

「北郷！一体何w『この力は．．．』——何？」

——俺自身を治せない『力』なんだ——

一刀の発言にその場の皆が驚く。人を治療できる『能力』。恐ろしく、且つ便利な『力』だが、自分を治療できない弱点があるとは一片も思わなかったらしい

「実はさ、おれ自身この能力大嫌いだったんだよね。さっき言ったでしょ？過去に冥琳みたいに思う人もいるって」

そう言い、一刀は自分の過去を語る・・・

生まれながら持ったこと『力』の事、

幼少時、そのせいで『化け物』呼ばわりされ、トラウマになったこと
その子が噂を流し、いろんな親からも変な目で見られ始めたこと
それ以来、誰にも言わず、人との関わりを無くし、苦しみ続けていたこと

やっと一人認めてくれた友を見つけたこと、

それによって、苦しみから解放されたような気持ちになれたこと、
それなのに、この世界へ送り込まれたことによって、また一人になったこと

ここは戦乱の世なのに、前の世界が争いごとがなく、平和だったこと
それにより、戦_{いくさ}ごとに苦しみ、一人で吐いていたこと
皆に怖_{おそ}がられるのを恐れ、この能力を伏せていたこと
また変に見られると思うのを恐れていたこと

冥琳を含み、雪蓮達はずっと一刀が語る間、衝撃的な一刀の過去の
事実_{じじつ}に驚きながらも、静かに聴いていた

そして、今回この能力を使った理由・・・

「俺はこの能力を伏せて、新しい人生を歩もうと思った。誰も知らなければ、化け物呼ばわりされなれないと思ったから。でも、大切な人達が苦しむのはもつと嫌だと気づいた。たとえ気味悪がれようとも、その人たちを支えたかった」

哀しい表情をし、一刀は語る。そして、一端息を吸いこみ、今だに出血が止まらず、血まみれの腕を再び持ち上げ、

「だからこの傷に誓う！この『力』は自分の為には無く、俺以外の人たちの為に天から授かった『力』だということ。もしこの『力』が孫呉に悪影響を及ぼすなら、俺が阻止して、民を守る！それでもし民から反感を抱いたら・・・」

一刀は冥琳に南海霸王を差し出し、跪いて頭を差し出す

「冥琳、君自らこの腕だけじゃなく、俺の首を斬ってくれ」

「っ！？」——北郷・・・お前・・・」

断固決心した声で、冥琳に自分の意思を伝える。そんな決心に、皆の視線は冥琳へ向き、彼女の返答を待つ。雪蓮はうつすらと笑顔を浮かべ、この二人のやり取りを見ていた

沈黙の後、冥琳は一刀へ近づき、数歩手前で止まった

「北郷・・・いや、一刀。先ほどまで言った無礼な言葉の数々、許してくれ。お前は辛い過去の経験を乗り越え、この『力』を使った。我々の為それを使ってくれた」

冥琳は一刀の片手を両手で強く握る

「一刀、そんなお前に私は感銘を受けた。本当にすまなかった。これからも孫呉のため、その『力』と共に、天の御遣いとして、そして孫呉の一員として、呉を支えて欲しい」

冥琳はそう言った途端、深く頭を下げた。その光景に誰もが驚く。軍師として、呉の中心の一人の冥琳が他人に頭を下げたところなんて、見たことがない。

そんな光景に驚きつつも、雪蓮は満足したのか、一刀の血が付着している南海霸王を返してもらい、冥琳の傍へ行き、頭を上げた冥琳と共に一刀に振り向き、こう語った

「一刀、私は貴方をあの夜呉に迎え入れたことを今日ほど感謝したことはないわ。そしてその決意、貴方の想いが付いたこの南海霸王に誓う。その想い、決して誰にも侮辱させない！」

そう言い、一度冥琳を見る。彼女も雪蓮の意を理解し、一度頷く。そして再び一刀に振り向き、二人は一刀の前で跪き、今度は二人で一刀の手を握り、こう誓う

「我、孫伯符はこの南海霸王に誓う。貴方のその意思、孫呉への思い・・・全てを無駄にしないわ。そんな貴方を侮辱したりする者は私の全てをかけて滅ぼしてあげる」

「我、周公瑾は己の命を賭して誓う。さっきお前が全て守るといったが、その全てを守るお前を私が守ってみせる。お前にその覚悟を誇りに思う。それを侮辱するもの、その誇り持つ者を傷つけようとする敵からは、私の持つ全ての知をもって排除してみせよう」

「そして、その誇りをもった者と貴方を守り抜く！」

二人の顔には、小霸王、そしてその小霸王を支える大軍師の威厳が溢れていた。

それを一刀は涙を一筋流し、二人に笑顔を向け、

「ありがとう．．．ありがとう．．．俺は二人に、そして呉の皆に出会えたことを誇りに思う」

一刀は全員を見て、

「これからも、皆を支えていきたい。みんな、こんな俺を受けいれてくれるのか？」

呉の将全員が深く頷く．．．それを見た一刀はとびつきり良い笑顔を作り、

「ありがとう！これ、か、らも．．．よ、．．．ろ、し．．．（バタ）」

急に倒れ、地面に伏せる

「一刀っ!？」

「いかん！出血が激しい！早く止血を！」

「思春！明命！早く医者を探して来るのじゃ！」

「ぎよ、御意！」

「亜莎！私達もなにか止血するものを取りにいくわよ！」
「は、はひい！」

慌しく、陣を駆け回る呉の将達・・・

一刀は気絶しているものの、そこには幸せ一杯の笑顔があつた・・・

一方、取り残された者、1名は・・・

「はあ、はあ、一刀さん、すごいですう、あふう・・・はあはあ」

一刀の『力』を直視し、未知な能力ということで知的興奮を受けている穏・・・

最初から今の今までずっと隅っこで体をクネクネ動かしながら悶え

ていた・
・
・

チー
ン

第06章 〱一刀、絆を求める〱（後書き）

コメントお待ちしております！
評価してくれると嬉しいです

第07章 く感謝を込めてく（前書き）

この話、どうかなあ〜って思うこの頃

頭の中でのストーリーと、文字で書くストーリーが一致しない気が・

・

でも！Enjoy please！

第07章 く感謝を込めてく

—— 天幕 ——

一刀「ん．．．．．ここは．．．」

目を覚ました一刀は天幕にいた

一刀「確か昨日は．．．そうだった」

一刀は昨日の出来事を思い出す

『力』をつかったこと

それを認めてくれた事、

最初は戸惑われたけど、ちゃんと謝って、自分のことを認めてくれた冥琳

雪蓮と共に、俺のことを守ってくれると誓ってくれた二人

そんな俺を認めてくれた皆のこと——

「それで確か．．．駄目だ、そこからちょっと記憶が曖昧だな．．．」

つつ、まだ痛むな」

一刀は自分で斬った腕の痛みを感じる。だが悪い痛さでは無く、むしろこれで皆に認められた事に誇りさえ感じる．．．そんな事を一刀が考えていると、

「やっとお目覚めか」

ふと声が聞こえた．．．

振り向くと、そこには冥琳が寝台の隣の椅子に座り、こちらのほうを見ていた

「冥琳．．．」

「まったく、お前は丸一日半寝ていたぞ。血を流しすぎだ。私に心配を掛けないでくれ。城に帰りたくてもお前がそんな状態では帰れん。幸い、兵糧は充分あったがな」

そんな冥琳の目の下にはクマが出来ており、良く見れば顔から疲労の表情が取れる

「ずっと、看病してしてくれたのか？」

一刀は自分の手で冥琳の頬に触れ、心配顔で冥琳に質問する

冥「／／／／／ま、まあ．．．お前に散々酷な事を言ってしまったからな．．．そ、その償いだ。た、たいした事では無い／／／」

顔を赤くしながら、冥琳が言う。そしてすぐ一刀の手を頬から離し、真剣な眼差しで一刀を見る

「それにしても、本当にすまなかった。何度謝っても足りないぐら이다．．．本当にすまない。だが、昨日誓った言葉に偽りは無い。これからは、私の全てを持って、お前を守り、支えることを誓う」

再び一刀に誓いをする冥琳。それを聞いた一刀は嬉しく思い、寝台からおり、冥琳を抱きしめる。冥琳は驚き、再び顔を赤くする

「／／／／／か、一刀？ど、どうしたんだ急に／／／」

「ありがとう、俺にとって冥琳は守って支えたい人の一人だってことは忘れないですよ？傷ついたら、嫌だからな？」

一刀は再び力を込め、抱きしめる。冥琳もそれに答る様に一刀の背中に腕を回し、抱きしめる

「ああ、これからもよろしく頼む。頼りにしてるぞ、一刀」

「うん。それにしても、兵達みんなは俺の事どう思ったのかな。

あんな不可解な『力』を見て、変に思われたらどうしよう。将達には認めてもらえたけど、そこがまだ心配かな．．．」

「昨日言ってすぐ心配か．．．まったく。お前は気弱いのか気強いのか判らんな。言っただろう。どんなことがあるうとお前を支えると。もっとも、呉の中ではその心配はないと思うがな」

「？どういうこと？」

「まあ、天幕を出たらすぐに分かる、もう歩けるな？」

「うん、それは問題ないけど・・・」

「では天幕を出て、外を見る。お前の答えが分かるはずよ」

一刀は意味が分からず、冥琳の言うとおりにした。天幕を出た瞬間

「「「「「「わああ――――――！！！！」

！！！！」

天幕の外には、一刀が治した全ての呉の兵達を含め、戦に出征した兵の全員がおり、一刀の姿を見た瞬間に歓声がその場に轟く

「御遣い様！ありがとうございます！」

「北郷様！貴方様は我々の英雄です！」

「お陰で家族にまた会えます！ありがとうございます！」

「御遣い様！同胞達を治してくれて、本当にありがとうございます！」

「これで彼女に会える！もう感謝しきれません！」

「これでまた自分の子供に会えます！うっ、うっ、ありがとうございます！」

「あなたのお陰で、死なないで済みました！ありがとうございます！」

「えっ？えっ？な、何？」

一刀はこの事に驚き、戸惑っている
今だに混乱中の一刀に、

「かゝずとつ」

真正面から誰かに抱きつかれた。下を見る、満面の笑顔で迎える小蓮がいた

「・・・シャオ？」

「私の大切な周々を治してくれてありがとう！ますます一刀が気に入ったわ」周々も貴方にお礼を言いたいって！」

「ガウ！」

シャオが少し離れると、隣に居た周々が顔を一刀の腹の辺りに擦り付ける。最初は驚きながらも、一刀は周々の頭を撫でる。すると周々は子猫の様にゴロゴロ喉を鳴らし、目を細めてされるがまま一刀に体を預けた

「一刀は私の大切な周々を治してくれた。そして、傷ついた兵達は、自分達の大切な人が待つ家へ帰れることに感謝してる。あなたを庇い、守って死んじやった人達は一刀の様な人を守れたことに誇りに思っているはずよ。呉の皆は貴方に感謝で一杯」そうだね、みんな？」

小蓮が皆へそうたずねると、再び歓声が沸く。一刀は感動のあまり、嬉しさのあまり少し涙目になりながらも皆に言う

「皆！ありがとう！本当にありがとう！」

上手く笑顔を作れたか判らないが、出来る限りの笑顔で皆に答える。
再び歓声が沸く。その歓声の中、呉の将達が一刀の周りを囲む

「さ、私達の城へ帰りましょう！」

雪蓮の一声と共に、皆は城へと帰っていった

黄巾の乱が終わり、一時の平和を得た雪蓮達

その後、更なる乱世になることは知らない

それでも、今はこの幸せを、

勝ち取ったこの平和を、

大切にしよう・・・

第07章 く感謝を込めてく（後書き）

コメント、評価、お待ちしております！

第07章1節 〈Interlude with〉（前書き）

では、ちょっとした中間地点・・・

彼女3人との出来事をEnjoy!

第07章1節 〈Interlude with〉

黄巾の乱もようやく終わりを告げ、一時の平和を勝ち取った雪蓮達。現在、戦後の後始末と通常の政務に追われる日々を送っていた・・・

Interlude 〈雪蓮〉

一刀は早朝に日課の瞑想を終わらせ、朝食も食べた後、自分の部屋に戻ろうと廊下を通り過ぎていると、

「あゝ、うゝ・・・んゝ、うあゝ」

不可解な唸り声が聞こえてきた・・・

「な、なんだこの音は？こつちか？」

その声（音？）を頼りに、その現場に向かうとそこは執務室から出てくる声だったらしい

その扉の前では、兵達が2人立っており、見張りをしていた

「よ、お疲れさん」

「ん？あつ！これは北郷様！こんにちは！」

「うん、こんにちは。唐突だけど、何してんの？」

「何をしているの・・・とは？」

「いやあ、執務室に見張りなんて必要なのかなあって思ったただだよ」

「あ、はい。これは周瑜様からの命令で見張りをしているのです」

「見張り？もしかして、雪蓮の？」

さっきの声を思い出し、雪蓮の声だったと認識する一刀

「はい。最近孫策様は街へあそぶゴホンゴホン、警邏に行つてばかりで、政務をまったくしてないと周瑜様が仰つており、そして我々が孫策様が溜まつてる政務を終わらせるまで見張りを頼まれたのでございます」

「ちゃんと窓からも逃げないように、窓の外にも兵が2名ほど配置されてますので、抜かりはないです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・まったく、何をしてるんだ雪蓮は」

呆れ顔の反面、雪蓮らしさを感じ、苦笑いをする一刀

「とりあえず、お勤めご苦労様。また後で来るよ。それじゃあね」

「はっ！」

—— 一刻後 ——

一刀は厨房から戻り、再び執務室まで向かい、見張りの兵に声を掛ける

「お疲れ、ちよつと雪蓮に話があるんだけど入っていいかな？」

「はっ、北郷様なら問題はありません！」

「どうぞ」

二人は扉から少し離れ、一刀は扉を開けて中に入る

そこには頭を抱え、呻き声をだしながら竹簡とにらめっこしている雪蓮がいた

「うゝ、ああゝ、うゝゝ・・・」

「まったく、かなり溜め込んでいたね、雪蓮」

「う？」

雪蓮は突然声が聞こえ、変な返事方をしてしまう。顔を上げると一刀が呆れた顔で雪蓮を見ていた

「街の人たちと仲良くなるのはいいことだけど、王として政務も少しはやらないとね」

「うゝ、一刀まで冥琳と同じ事を言う！ぶう・・・それにしても、なんでここに来たの？」

「いや、執務室の外から変な声が聴こえたから、声の主を見つけた

かつただけさ」

少々悪戯っぽく言う一刀。雪蓮は最初は頬を膨らめて「ぶう」と怒っていたが、次第に一刀以上の悪戯っぽい笑顔になった

「ねえ、一刀、k『それは無理』まだ何も言っていないじゃない!」

「どうせ、俺の言葉の勉強とかいう言い訳で、政務を押し付けようってことでしょ?」

「うっ」

一瞬で知力勝負で負けた雪蓮・・・哀れなり

「俺に押し付けても出来ない奴が多いから、雪蓮がやらなくちゃならない、これは国の王として当たり前だよ?」

「確かにそうだけど、私にはこういうの向いてないの。こういうのは冥琳達に任せて、私は街で直接民に触れ合う。適材適所ってやつよ」だから私は街に行つて『させる訳無いじゃん』うっっ」

椅子から立とうとした瞬間、一刀は雪蓮の肩を掴み、ストンと雪蓮を再び座らせる。そして満面の笑顔を雪蓮に向け、

「確かに雪蓮の言うとおりかもしれない。でも政務とかちゃんとこなせてこそ、本当の王だと俺は思う。俺は雪蓮にそんな立派な王になって欲しいからね」

「・・・うー、そんな顔でそんな風に言われたら、逆らえないじゃ

ない」

「まあ、だからそう言ったんだけどね。お詫びにこれでも飲んで元気を付けてよ」

そういつて、雪蓮に杯を渡し、一刀はさっきまで持っていた飲み物を入れる容器を取り出した

「何？何！？お酒？」

期待に目が輝く雪蓮

「政務中にそんなものあげるかよ」

一瞬で絶望の底に落ちる雪蓮

「（こころ表情が変わるの雪蓮・・・か、かわいいな）でも、これも捨てたものじゃないから、せっかく作っただし、飲んでよ」

そういつて、雪蓮の杯に液体を注ぐ

一刀が注いだのは、橙色の液体・・・それを見たことない雪蓮は混乱の表情を出す

「一刀が作ったの？（興味あるわね）って、何これ？」

「ジューズっていつて、果物や野菜を液体状にした飲み物だよ。少

し蜂蜜で甘くしてるから、気に入ると思うよ。今回は蜜柑味ね」

「へえ、私は蜜柑好きよ。（コクコクコク）っ！？なにこれ！甘くてすごくおいしい！」

新鮮な蜜柑の味わい方に目を輝かせながらジュースを飲む雪蓮

「疲れたときには甘いものが一番。それにそうやって何も食わず飲まず政務やつても間違えるだけだよ。だからこれでも飲んでがんばってね」

そういつて、残りのジュースが入っている器を机の隅に置く。雪蓮は気にすることなくさっきもらったジュースを飲み干す

「ふう、本当においしいわね。ありがと、一刀」

雪蓮は本当においしかったのか、さっきまで眉間にシワを寄せていた顔はなく、満面の笑顔を浮かべた。それを見た一刀は、

「ふえ？か、一刀？」

普段の雪蓮からは絶対聞けないような声・・・一刀は雪蓮に近づき、急に頭を撫で始めた

「そう、その笑顔だよ。みんな、その笑顔についていこうと思ったんだよ。俺は雪蓮のその笑顔が好きだし、それを見たら雪蓮のそばにいて良かったなあゝって思う。民もきっとその笑顔が好きなんだ。冥琳が雪蓮に怒るのは政務をほったらかしにして街にいくからでしょ？ちゃんと少しでも毎日やってれば、彼女も怒らないよ。だから少しでも毎日やって、そして残った時間に民達を安心させる為その笑顔を見せに行けばいいんじゃないかな？」

そうやって満面の笑顔で雪蓮の頭を撫で続ける
雪蓮は少し頬を赤くしながら惚けている。一刀は頭から手を離し、扉のほうを歩き出す

「（大人なのに頭を撫でたからちょっと恥ずかしかったのかな）それじゃ、がんばってね。疲れたらちゃんとジュース飲むんだよ。また来るよ」

ボタン

「・・・・・・・・・・やられたわ」

暫くした後、ようやく気を取り戻した雪蓮の第一声がそれだった

「あんな風に頭撫でられたのっていつ以来だろう？安心する手だったわ」

——俺は雪蓮のその笑顔が好きだ——

雪蓮は一刀の言ったことを頭で何度も繰り返す。そして何度も頬を赤に染める

「・・・ふふ、本当に惚れちゃったかな？それにしても、一刀は相変わらず良い男ね」

——俺は雪蓮に立派な王になって欲しいからね——

「・・・もつとがんばって、一刀がいつも笑顔でいれるぐらいの王にならないとね」

そう言って、竹簡に再び目を向ける。そして、杯にさっきもらった『じゅうす』を注ぎ、一口飲む

「・・・ありがとう、一刀。これからも、ただ呉の将ではなく、私と肩をならべる同等の存在として、友として、私を支えてね」

呉に来て以来、一刀の数々の支えを思い描き、感謝をする雪蓮

「さて、さつさと終わらせて、一刀でも誘って街に出よう」と

いつもにも増した真剣な表情で雪蓮は取り掛かった

後日から、仕事はする様になるが、良く雪蓮が一刀を振り回しながら街を周っている光景が増えたらしい・・・

Interlude 　　冥琳

この日、冥琳は本屋で新しい本を見ていた。水鏡塾から新刊がでたらしい

??「相変わらず、冥琳は勉強に熱心だね」
「ん？」

聞き覚えた声に振り向く。そこには一刀が大量の食材が入っている袋を抱えていた

「一刀か・・・すごい量の食材だな。ぜんぶ買ったのか？」

黄巾党本陣討伐以来、冥琳は一刀の事を名前で呼ぶようになった。理由は、それが彼女なりの最大の敬意らしい。

「いや、街で子供達を遊んでたら、その親達からおすそ分けとかで

沢山もらってね・・・」

「民達に慕われているのだな。まあお前ならそうなると信じていたがな」

自分の様に嬉しく思う冥琳

「ところで冥琳はこの後暇？」

「ん？いや、今日は私の休日なのでな・・・一日ゆっくりしていいと思う」

「そっか、なら一緒にお昼でも食べないか？」

「そうだな、そろそろ昼食か・・・いいだろう。なら食べに行くか。この本を買ってくる、少し待っていてくれないか」

「了解。んじゃ外で待つてるよ」

一刀は表に出て、冥琳はすぐ本の支払いを済まし外へでる

「待たせたな。さて、何処で食べようか・・・」

「それなんだけどさ、城の厨房で食べようよ」

「城でか？何か調理師に頼みたい料理でもあるのか？」

「んゝまあ、そういう事で」

「？？？」

「さ、早く行こうよ」

「っ、お、おい？」

一刀は左手で食材を抱え、そして右手で冥琳の手を握り、城へ歩き始める

「あ、ご、ごめん、嫌だった？」

すぐ手を払おうと思ったが、冥琳の手に力が入り、一刀の手を離さない

「いや、急だったので驚いただけだ。お前さえ良ければこのままでいい」

一刀は冥琳の承諾を受け、笑顔で城に戻る

「よし！なら早く行こう！お腹が減っちゃったよ！」
「……………ふふっ」

厨房に着くまで、冥琳はほのかに顔が赤くなっており、ずっと笑顔のままだった

—— 厨房 ——

「さて、何か頼むか……一刀、お前は何か食べたい？」

「いや、今回は俺が料理を披露するよ」

「っ！？一刀が？料理なんて出来るのか？」

「こう見えても、前の世界では沢山料理してたからね」

「それは初耳だな」

「だからここは任せて、冥琳はゆっくり料理ができるのを待っててよ」

「う、うむ」

「少し時間が掛かるから、さっき買った本でも読んでてね」

「わ、わかった」

一刀はそう言っ、料理に取り掛かる

コネコネ

バン・・・・・・・・バン・・・・・・・・

コネコネ

バン・・・・・・・・バン・・・・・・・・

「何を作っているんだ？」

「ん？これは俺が前に住んでいた世界でよく食べた『うどん』って料理だよ。麺がちよつとここで食べるのと違うから、自分で作ってるんだ」

「ほう、天の国の料理か。楽しみだ」

そういつて、麺を伸ばしてはまたコネて、それを繰り返して最終的にうどんの麺の太さに切り刻んだ。そしてダシを作り、子供の親達から頂いた野菜を刻んで盛り付け、立派な『うどん』ができた

「よし！できた♪」

一刀も久しぶりに日本の料理を食われて、嬉しくなる。冥琳は一刀の持ってきた料理をまじまじと見る

「ふむ、麺は太いが、ラーメンに似ているな」

「ダシは塩味にして結構サッパリしているから、おいしいと思うよ」

「いただきます」

そして二人は食卓に座り、うどんを食べ始める

「ず、ズズズー・・・ん！これは・・・おいしい。これが天の国の味か」

「ずず、ずー・・・食材は同じだけど、ダシにする方法とかが違うからね」

二人は天の国の話とか、冥琳と雪蓮の思い出とか、他愛のない話とかをして、あっという間に『うどん』を食べ終わった

「ふう、本当においしかった。今日は私を招いてくれて感謝する」
「いやいや、俺も冥琳とこうやって冥琳と一緒に食べれて嬉しかったよ。また二人で食べようね」

「ああ、また一緒に食事でもしよう。お前なら大歓迎だ」

と言った後、冥琳はすこしあくびをする

「疲れたの？」

「いや、最近政務が多くてな、ゆっくり眠れなかったのだ。おいしい料理も食べたし、少ししてから休むでしょう」

そういう冥琳に、一刀は少し考え、いきなり食卓から飛び立つ

「い、いきなりどうしたんだ一刀」

「そしたら、一緒に昼寝しよう！とっておきの場所があるから行くー！」

「一緒に！？／＼／＼と、唐突だな．．．っておい！待て、腕を引っ張らなくても良い！」

再び冥琳の手を取り、強引に引っ張っていく

「まったく、どこまで連れて行くんだ？」
「ここ、ここ」

一刀が来たのは中庭にある大きな木の下

「ここって結構日も当たるし、涼しい風が吹くんだ。すごい気持ちいいから、少しここで休もう」

一刀は先に木にもたれ掛かって座り、自分の太ももをポンポンと叩き、冥琳を見た

「・・・何のつもりだ一刀？」

「何って膝枕」

「なっ／＼／＼そのような恥ずかしいことを私にするのか!？」

「恥ずかしいって・・・でもさ冥琳」

急に真面目な顔になる一刀。それを察し、冥琳も真剣な顔になる

「ここ数年、冥琳は誰かに頼ったことある？」

「それは、戦とかになると将達に頼ったりh『そういうんじゃないくて』・・・」

「冥琳はさ、誰かに精神的に支えてもらってるのかなあって聞いたいの」

「それはもちr・・・」

冥琳は考え込む、他の人は私に頼るが、私自身は誰に頼っているのだろうか？雪蓮とはお互い認め合い支え合うが、精神的に最近お互い

弱音を吐いたりしていない。だんだんと官位が上がるにつれ、弱音を吐く暇がないからだ・・・そう考えている冥琳の表情に、一刀は一息して、冥琳に言う

「冥琳ってさ、すごい頼りがいがある人なんだよ。皆だから冥琳に頼るし・・・でも逆はあまりないでしょ？それに冥琳は呉の中心の人物。だからあまり人に頼ったり弱音を吐いたりする相手がいないってのも事実」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だからさ、天の御遣いっていう変な立場にいる俺は、せめて冥琳達が弱音を吐いたり、一緒に泣いたり、お互いを同等に支え合う存在になりたい。これはおれ自身の我儘かもしれないけど、冥琳にはもつと俺に寄りかかって欲しいかな。たまにこうやって誰かに支えてもらわないと、精神的にもたないよ？」

「一刀・・・・・・・・」

冥琳は一刀の言葉に心を打たれる。涙目になりながら、一刀を見つめる。決して下心はなく、純粹に冥琳を心配し、その支えになろうという目をしていた

「だから（ポンポン）ハイ」

「そ、それとこれと関係あるのか!？」

一瞬で顔が真っ赤になる冥琳

「んゝ誰に寄りかかるって感じで、昼寝だったら膝枕かなあって思

ってね．．．でも、そうだよ、男のかたい膝なんて心地良い訳ないよね」

つと、半ばあきらめようとし、立ち上がろうとした一刀に

「そ、そんなことはない！その、だ．．．失礼する／／／」

顔を赤くしながらも、一刀の膝枕に自分の頭を乗せ、横になる

ふわっ

「あっ」

思わず声だ出てしまった。決してやわらかい膝枕では無い。でも、なんか心が落ち着くような気分に冥琳はなった。一刀は冥琳の髪をゆっくりと撫で始めた

「どう？人に頼りきった感じってのは？」

上から一刀の声が聞こえる

「ふふっ、悪くないわね。こうやってされるがまま身を委ねたのは久方ぶりだ。案外良いものだな、安心する。一刀、ありがとう」

「どういたしまして、その変わり俺も辛いときには頼っちゃうよ？」

「ふふ、任せろその時には膝枕でもしてあげるわ」

「うっ、冥琳の膝枕か．．．恥ずかしいな」

「何をいう、私が恥ずかしがっても強引に膝枕をしてきたくせに」
「うう．．．」

顔が赤くなる一刀。それを見て笑顔になる冥琳

「まあ、お互い支え合おう。ふわあ．．．すまんが、少しの間このまま寝ても良いか？」

おいしいご飯を食べ、日ごろの疲労が襲って、瞼が重くなる冥琳。
一刀はゆっくりと冥琳の頭を撫でる

「もちろん、冥琳は今日ゆっくりと過ごすつもりだったんだろ？だつたらゆっくり休んでくれ」

そついうと冥琳は目を閉じ、眠りに入る。一刀は冥琳の頭を撫で続け、そして一刀も眠りに入った

その夜、その光景を雪蓮が目撃し、数日間一刀に膝枕をおねだりする雪蓮がいた

Interlude 〽明命〽

この日、明命は一刀と一緒に街の警邏をしていた。一刀は街を周るほど自分の両腕に色んな物が埋まっていく

民「お、御遣い様！桃でも食べてください！」

一刀「ありがとう！ここの桃って大好きなんだよ。また買いにくるね」

という風に

民2「これはこれは北郷様。今肉まんが蒸しあがったところです。食べてくだせえ！」

一刀「お、美味そうだ。おっちゃんありがとう！兵に今度ここで肉まん買つように言つよ」

次から次へと・・・

民3「御遣い殿！今おいしい焼き魚が出来上がったんでさあ！お一つどうですか？もちろん、料金無しです！」

一刀「魚かあ！いいね、一つもらつよ。ありがとう」

色んな人に食べ物を恵まれているからだった

数刻後、一刀に腕一杯の食べ物があった。それを見た明命は

「一刀様は街の人に大人気ですね！」

「いや、そうでもないよ。ただ良く街に行つて人と話してるから、どんどん仲良くなっただけさ」

一刀は時間がある度に街に出て行き、沢山の人とお話とかをするのだ。王に近い存在の人が普通の民と触れ合い、遊んだりするのが今まで無かった為、最初は戸惑った民達だが、次第に一刀の性格に惚れこみ、すぐに仲良くなつたらしい

「さあ、がんばって警邏をしようか！その後に一緒にみんなからもらった食べ物を食べようね！」

「はい！がんばります！」

と、真剣な顔になった明命は

にゃー

明「お猫様！？」

一瞬で顔がにやけて声の主へ走っていく

「ちよっ、明命！どこに行くんだ？」

明命に一刀の声は聴こえず、どんどんと裏路地へ進んでいった

「ぐっ、この、こなくそ、くっ、うお！？」

食べ物落とさないように自分と戦いながら、明命の後を追う

—— 裏路地 ——

一刀「ふう、明命はどこにいったのかな」

すると、奥から声が聞こえ、そっちへ向かう

「お猫様、お猫様、今日は煮干をもってきました」
「なー」

猫は少し興味を出す

「差し上げますので、モフモフさせていただきますか？」
「にゃっ！」

要求を理解したのか、すぐさま離れる猫

「あうあう、嫌われてしまいました。最近モフモフしてないので寂しいです」

しゅん・・・っと肩を落とし、落ち込む明命

それを見た一刀は明命に近づき、食べ物が入っている袋を下ろし、頭を撫でる

「あつ」

一刀にまったく気づかなかった明命は頭に乗った手に驚く。一刀は撫で続け、

「明命は本当に猫が大好きなんだね」

「はい！お猫様は本当にだいですk『にゃー』えっ！？」

突然、沢山の猫が一刀の周りを取り囲み、時には鳴いたり、時には一刀の足に体を擦ったり、周りに十匹ぐらいの猫が集まった

「すつ、すごいです！一刀様はお猫様の神様ですか！？」

「ははは、なにそれ？そんなものじゃ無いよ。でも俺の『氣』の性質は動物に好かれやすいみたいだからね。その影響がこれさ」

先ほどまで明命が懸命に話しかけていた猫に一刀は撫でたり寝転がしたり．．．猫はされるがまま気持ち良さそうに『ゴロゴロ』と喉を鳴らしていた

「うう．．．うらやましいです。私もそうやって懷かたいです．．．」

自分の目の前に見える光景に羨ましくなる明命

「俺の傍を離れない間なら少しぐらいならできるよ？」

「え？ できるのですか！？ どうやってできますか！」

「お、落ち着いてくれ．．．顔が近い近い！ 俺の氣はある程度なら空間を作るから、その影響でたぶん明命も俺の氣を纏うことになるよ．．．あんまり長くはできないけど．．．ふっ！」

一刀は少し息を吐き、自分の氣を周りに充満させる。明命はその氣を間近で感じ取り、自然に笑顔になる

「（すごい安心できます。これが一刀様の氣．．．お猫様が集まる理由が分かった氣がします）『ニャー♪』お猫様！？」

すると突然、一刀の周りにいた猫たちが明命に纏わり付く。猫自らは顔にジャンプしたり、モフモフしたり、明命の体中にご自慢の毛皮を当てる

「はうあああゝゝゝゝゝゝゝ
♪ ♪ モフモフ！お猫様から！お猫様
からモフモフしてくれます！」

今までに無いくらいの幸せな表情を浮かべ、猫たちの毛に埋もれながらその感触に浸っている

少々時間が経過し、一刀はそろそろ頃合だと思い

「明命、そろそろ終わっていいかな？」

「あ、はい！ありがとうございます！」

すると一刀は氣を自分の体内へ戻し、ゆっくりと息を吐く。その瞬間、猫たちは明命の周りから離れ、再び一刀の周りに駆け寄る。

「ふう、周りに自分の氣を充満させて、それを維持するってのはやっぱ難しいな・・・」

「あの、すみません。そんな苦しい思いをさせて」

良心が痛むのか、一刀に謝る明命。そんな一刀は再び明命の頭を撫で始める

「全然気にしないでいいよ。氣を自分にまた戻せば、すぐに元通りになるから。それよりも、猫達と遊べて楽しかった？」

「あ、はい！こんな楽しかったのは初めてでした！」

本当に楽しかったらしく、満面の笑顔になる明命

「それは良かった。これからも猫達と遊びたかったら、俺を呼んでいいからね？時間がある時には俺も一緒に遊ぶからさ」

一刀は笑顔で明命に言い続ける。その笑顔に明命は見惚れ、

「一刀様・・・」

「でも、ちゃんと猫達には遊んだお礼をしないといけないよ？」

ポンポンつと頭を二回叩き、手を離し、明命を笑顔で見つめる

「はい！もちろんします！これからもよろしくお願いします！」

「よし！それじゃ警邏に戻るか！」

「はうあ！すっかり忘れてました！」

現実に戻り、仕事をすっぱかしたことに気づく

「あうあう・・・お猫様のことで忘れてしまいました」

「あはは、じゃあさっさと終わらせちゃおう！おいしい食べ物がつてるからね」

一刀は明命の手をつなぎ、再び大通りへ戻る

「~~~~~／／／はい！」

恥ずかしながらも、手を離さない明命。その表情には照れている反面、幸せの表情も見れた

その後、暫くの間、隠密行動しかほとんどしていない明命が表沙汰に一刀と警邏をしないと申し出る日々が続いた．．理由は．．．
言うまでも無い

第07章1節 〈Interlude with〉（後書き）

思ったこと、これがいけなかったこと、少しでも興味をもっていた
だけたら、一言声をかけていただけたら嬉しいです

第08章 く知力を求めてく（前書き）

一刀は内政に取り組みます！
生暖かい目で読んでください♪
コメントお待ちしております！

第08章 く知力を求めてく

朝

コン、コン

「冥琳、俺だけど・・・」

「一刀か、入ってくれ」

一刀は早朝、冥琳に部屋に來いと呼ばれ、朝食を済ましてから彼女の部屋に訪れた

「お邪魔します」

「すまんな朝から呼び出して」

「全然気にしなくていいよ。それで話ってなに？」

「ああ、それはだな・・・」

すこし間をおいて、話し出す

「さっそくだが、一刀・・・お前はこれから我ら孫呉がすべき行動は何か判るか？」

「これから？うん・・・」

少し考え込む一刀、そして何やら一人でブツブツ言い始めた

「黄巾・・・ブツブツ・・・諸侯・・・ブツブツ・・・あつ
！軍と内政強化だ！」

「その通りだ、どうしてそう思ったんだ？」

「黄巾の乱が終わって、みんな一時期の平和を取り戻したんだ．．
でもまだ腐った時代が終わったわけじゃない。だから他の諸侯達も
起こるだろう新たな乱世に備えて内政を強化し、軍を整え、準備し
てるはず。だから俺達も内政強化や軍を強化したりしないと他の諸
侯達に吞まれるってことでしょ？後は『今まで大人しくしてた虎が
暴れだす時が近づいた』ってというのが裏の理由でしょ？」

その言葉に冥琳は不適な笑みを見せ

「・・・まったく、正解だ。そこまで読むとはやっぱりお前はす
ごいな。そうだ・・・今は袁術の客将として働いているが、この城
とその城下町は我々孫呉の民達だ。その民達に苦しい思いをさせた
くないからな。すぐに我らの手に戻る」

固い意志を見せる表情に一刀は少し見惚れるが、冥琳は気にせず続
ける

「それで、正直な話・・・お前の武は全くわからん。まあ、最後に
あの黄巾党の頭達を倒しているから多少はできると思うが、実力が
はつきりしてないからな・・・それは後ほど試すとする。軍の準備
は思春、明命、祭殿、亜莎等、充分に有能は将が多いから大丈夫だ

が、内政に関してはどうも文官が足りない。私と穏、そして蓮華様もいるが、内政の方が軍の準備より人がいると私は思う」

「まあ、人を政治で纏め上げるのは、いろんな頭脳があった方がいいからね。それは賛成だよ」

「ああ、そういつてくれると思ったよ一刀。それでだ、お前には内政を手伝ってほしいんだ」

「え？ いいの？ 俺は政治なんて経験無いよ？」

「前にも言ったように、お前は思ったこと、感じたことを素直に言えがいい。それが助けになるのかもしれないかは、最終的には私が決めることだからな・・・だが、あまりがっかりさせないでくれよ？」

悪戯っぽい笑みを見せながら一刀に言う

「ははっ、そんな事言われたら本気でがんばらないとな。それだつたら冥琳・・・ん・・・そうだな・・・俺に1週間の自由を今からくれ」

「おいおい、今言つてた話聞いてたのか？ 内政の方で手伝ってもらいたいって・・・そんな余裕、我らにないぞ？」

一刀の急な休日要望に驚く冥琳

「確かにそうだけど、正直街のことほとんど知らないんだ。子供と遊んだり、おいしいご飯食べたり・・・そういう事しかしてなかったから、今回はちゃんと『街』を見て、最善の改善方法を見つけたいからね」

「・・・なるほど。書類ではなく、実際に経験したことから思い

つく政策もあるって事か・・・良いだろう、そしたら1週間の自由をやるう。一週間後、思ったことを纏めて報告してくれ」

「ありがとう、それじゃ一週間ちよつと街を出歩くな」

「ああ、頼んだぞ一刀」

『了解』といいながら一刀は冥琳の部屋を出た、残された冥琳は

「・・・まったく、竹簡を見ず、民を触れ合いながら政策を考えるなんて・・・やっぱり他の文官たちと違うな。どちらかというと、雪蓮側の発想する者か・・・一週間後が楽しみだな・・・うーむ、そつだな・・・よし！誰かある！」

侍女「お呼びでしょうか周瑜様」

冥琳は何か決断したらしく侍女にある人物を連れてくるように頼んだ

少し時が経過した後

「お呼びでしょうか？」

侍女に呼ばれた人物は思春だった

「ああ、ちよつとこれから1週間の間頼みごとを聞いてくれんか？」
「何なりと」

「今から1週間の間、蓮華様の護衛の任を解く『なっ！？それは！』話は最後まで聞け。ついさっき、私は一刀に1週間の自由を与えた。内政強化の為に街を自分で見てみたいらしい。そこで、隠密に長けるお前に一刀の行動を観察してほしいのだ」

蓮華の護衛の任を解かれ、少々複雑な気持ちになる思春だが、呉の為に一刀が動いているのは判っているのか、反対はしなかった。それに、一刀がどう動くのか、思春自身も興味があるらしい

「・・・判りました。この1週間、北郷の行動を観察致しましょう」
「ああ頼むぞ。『天の御遣い』はどういう方法で政策を立てるのか興味をもつてな・・・本当に一週間後が楽しみだ」

冥琳は子供の様に目を輝かせ、期待に満ちた表情を浮かべている。それを思春はいつもの冥琳とのギャップを感じ少々引くが・・・

「・・・そ、それでは行つて参ります」

なんとか返事をして冥琳の部屋を去る

これから思春の『一刀ストーク』『ギロリッ』『ゴホンゴホン、観察の
1週間』が始まる・・・

第08章 く知力を求めてく（後書き）

コメント、指摘、評価、何でもお待ちしてます！

意見を聞かせていただけたら嬉しいです。これからの為に！

では次回で！

第08章1節　く報告！　Part1く（前書き）

思春が一刀の1週間で冥琳に報告！

さて、彼は一体どんな政策方法をとったのでしょうか・・・

第08章1節　＼報告！　Part1＼

一週間後・・・

この日、思春は一刀の行動を報告するために冥琳の部屋に来ていた

「さて、思春よ。一刀はこの1週間どういう行動を取っていたのだ？」

「・・・・・・・・・・」

「どうした？言葉にできない程凄かったのか？」

「言葉にできないというのは当たってますが・・・」

「本当にどうしたというのだ？そんなに凄かったのか？」

「いえ・・・」

思春の表情が読み取れない冥琳。彼女は一体何を見てきたというのだ？

思春は少し複雑な表情をしながら、

「殆ど・・・寝ていました」

第08章1節 報告！ Part1（後書き）

冥琳「すまぬがLinuxよ・・・この話はちと短くないか？」

作者「いやいやいや ソンナコトナイヨ？」

冥琳「ではなぜそんな風に喋る？」

作者「いやあ、決して手を抜いたって訳じよ『チリーン』・・・」

ドサッ

冥琳「お、おいリンクス！おい！・・・ち、これでは話が聴けないじゃないか！」

思春「安心ください冥琳殿、私が全部見てたので問題ないです」

冥琳「そ、そうか・・・では聴いてよいか？一刀は一体・・・？」

思春「では・・・次回で」

冥琳「思春・・・お前もか！くっ、しょうがない、では皆の者、次回で会おう！」

作者「・・・結局僕は放置ですか・・・まあ、いいんですけどね？でも、いつも放置されて嬉しくなる変態さんではないのですよ？」

コメント・指摘・評価・・・なんでもお待ちしております！

第08章2節 〽報告! Part2〽(前書き)

思春が一刀の一週間を語ります!さてさて、彼は一体何をしていたのでしょうか?

第08章2節 報告！ Part2

「・・・・・・・・寝ていた？」

冥琳は思春の報告に面食らっていた・・・

あの一刀が？

街を見たいって言うから1週間の暇を与えたのに睡眠ばっかとしていただと？

あの一刀からはありえない行動だ・・・

「思春、一刀は本当に寝てるだけだったのか？」

「それ以外の行動は殆どとっておりません」

「ふむ・・・思春よ」

「はっ」

「お前の見てきた1週間、なるべく詳しく私に話してくれ」

「御意。私はあの時此処を去った後、北郷を城門の前で見かけました・・・」

ときは1週間前に遡る・・・

{ Day 1 }

城門で一刀を見つけ、その後をつける思春

(どんなことをするのか、じっくり観察させてもらって北郷)

一刀は大通りまで行き、ブラブラと街を散歩するが・・・

「ああゝ！御遣いの兄ちゃんだ！」

「え？あ！本当だ！御遣い様だ！」

「御遣い様ゝ」

「お兄ちゃんゝ」

すぐに子供達に捕まり、周りを囲まれる。一刀は笑顔で傍にいた小さい女の子の頭を撫でた。その子は幸せそうな満面の笑顔を浮かべ、一刀の足に抱きつく。一刀のそんなやさしい態度に子供たちはさらに懐く

思（やはり、人気者なのだな・・・民へのあの想いはちゃんと行動に現れる・・・か）

一刀のやさしさに感心するも、観察を続ける

「みんなこんにちは！元気にしてたか？」

「うん！」

「当たり前だよ！」

「つてか御遣い様とは昨日あつたばかりじゃなか！」

「また一緒に遊んでくれるの？」

「うーん、そうしたいけど今日はちょっと用事があるから、また今度遊ぼうね」

「「「「ええええええええ」」」」

がっかり肩を落とす子供達。そんながっかりした子供たち元気よく一刀は答える

「でも、今度お休みができたときは必ず遊ぼうね！」

「約束だよお兄ちゃん！」

「破ったらお母さんに言っちゃうからね！」

「今度また新しい遊び教えてよ御遣いの兄ちゃん！」

「まえの『だるまさんがころんだ』はとても楽しかった！」

約束が嬉しかったのか、笑顔で答える子供達

（本当に子供に愛されているな・・・やはり一刀は親しみやすい存
z・・・ん！？）

思春は遠くからなにやら急いで一刀達へ走っている男を見つけた。
途端に・・・

「ど、どろばー！だれかその男を捕まえてくれ！」

その更に後ろからもう一人の男が先ほどの男に指を指し叫んでいた。その声に一刀は反応し、子供達に・・・

一刀「みんな、ちょっと離れてくれるかい？」

そう言うと、子供達は素直に後ろへ下がる、そして一刀は立ち上がり、その泥棒に目を向ける。そして一瞬目を大きく開き、すぐに子供達のところへ行き、

一刀「大丈夫みたいだ・・・それじゃ、今回は一緒に遊べないけど、また今度遊ぼうな！」

と笑顔で子供達に告げ、自分はその場を去る。その瞬間、警備隊が人ごみから現れ、泥棒の捕獲に成功した

（街の泥棒さえ自分で捕まえず、ただ街をほつつき歩いている・・・
一刀、お前の目的は一体・・・）

少々一刀の行動に混乱しつつも、再び追跡を開始する・・・

すると一刀はまだ昼だというのに宿屋に入り、部屋を借りた。自分

の部屋に入ると、一刀は窓の外をしばらく眺め、そして・・・

「ぐう・・・」

（寝るんかい！？）

思春からありえない関西弁が思わず出てくる程唐突だった・・・

—— 同時刻 ——

とある茶店にて

?? 「おおっ!？」

?? 「どうしたの? 風？」

風? 「むゝ、風の実在意義の危機感を感じたのです」

?? 「は？」

・・・という会話があつた様な・・・

—— 宿屋 ——

一刀は外を眺めながら寝てしまい、夜になって目を覚まし、少し外

を歩いた後、また宿屋に戻り、今度は寝台で寝始める

（まったく、北郷は何が目的だ？一体何をしたいんだ？）

一方、思春は一刀の行動が分からず、影（屋根裏）から一刀を観察しながら、彼女も少しの睡眠をとっていた

「・・・。」

）Day 2（

一刀は早朝に起き、宿屋を出て他の地区へと移動していった。そこで適当な店で食事を取り、店主と他愛の無い話をし、その後に着早々宿屋へ行き部屋を借りる・・・

そして少し窓の外を眺め、暫くしたら・・・

（ええい！なんでまた寝るんだ！）

一刀が到着早々部屋で寝始めて、少しイライラする

本当にこいつは呉を想って働いているのか

本当に街を良くする政策を立てているのか

本当に呉の民に平安をもたらす存在なのか・・・

一刀の不可解な行動に苛立ちを感じ、思春は一刀の行動に疑問を抱

くが、その瞬間思春は部屋から離れ、一刀の見張りを止める

街

賊1「へへへ、おらおっさん、金目のモン全部置いて消えな」

賊2「痛い目にあいたく無いだろ？げへへ」

賊3「頭が胴体からおさらばする前に言うことを聞いたほうがいいんだな、ぐふ」

商「ひ、ひいひい！お助けを、これは私の娘への贈り物なのです。どうかお許しを！」

商人は手元に何かの包みを抱えており、それを盗もうとする賊の3人に囲まれていた

賊1「そんな事知るかよ！とつとつそれを渡しやが」
『チリーー
ーン』
「・・・ドサッ」

「寝ろ、下衆が」

賊の一人が商人に襲い掛かる瞬間、思春が突然現れ、その者の首筋を手刀で気絶させ、そして残りの二人を睨み付ける

「ひ、ひいいい！逃げろ！」

「逃さん！」

ドカ、バキッ、バコッ、ドスッ、ガッ

あっという間に賊の3人を捕らえ、気絶させる思春

商「甘寧將軍！ありがとうございます！」

商人はすぐに彼女に礼を述べ、その場を去る。思春は気絶した賊たちを警備の者達に引き渡し、

（一刀、お前が何をするのかわからん。正直疑いたくもなる・・・が、この1週間、お前を信じよう。じっくりとお前の行動を観察させてもらうぞ。その間だけだが、こういう不届き者は私が排除しよう・・・必ず呉の為になる政策を立ててくれ）

一人でそう呟きながら、一刀のいる宿まで歩き始める

「．．．x」

Day 3

一刀は再び早朝に起き、他の地区へと移動する。この地区は活気盛んで、様々な行商人が売り物をしている。一刀はその市を周り、たまに行商人達を話をし、適当なところで食事を取り、そして．．．

(.....) orz.....

再び宿屋で寝た一刀に呆れる思春・・・が、夜になると一刀は再び起きて街を見廻る、そして数刻後、再び部屋へ戻り、床につく。思春は一刀がもう起きないだろうと判断し、彼女も少しの睡眠（もちろん天井裏）を取る

「.....x」

一刀のこの眩きは誰にも聴こえなかった・・・

＼Day 4＼

この日、一刀は誰でも分かるぐらい治安の悪い地区を訪れた・・・

西地区

ここには降伏した賊達や仕事の無い人、悪さを続ける者などウヨウヨ住んでいる

その地区へ入る前に、一刀は自分の「氣」を自然と同調させる。すると目には見えるが、気を抜くと一刀の存在を見失いそうになるくらい存在が薄くなった

（あいつ、あんな事まで出来るのか・・・）

思春は一刀の『氣』の応用力に素直に関心する。そして意識を集中させ、一刀の後を追う

一刀は西区域に入って行き、街をくまなく観察する・・・そしてある程度街を一回りしたら他の地区へ行き、宿屋を借り、また寝始める。夜になり、また外を一回り歩き、再び寝台に一刀は入った。いい加減思春は慣れたのか、何も言わず自分自身も少し睡眠を取った

「・・・×・・・」

5日目、この日一刀は城に戻り、自分の部屋に戻り、何やら竹簡に書き始める。思春はずっと一刀を見張っていたが、厠と食事以外は部屋を出る気配はまったく感じなかった。ある程度、書き物が終わると一刀はすぐに睡眠に入る。そして・・・

7
日
目

6
日
目

瞬く間に1週間が経ち、そして一刀の自由期間は終わった。思春は一刀の事がまったく理解できず、報告する為に冥琳に部屋を訪れる

「・・・そして、今に至るわけです」

思春は自分が見たこと、感じたことをすべて冥琳に話し、一刀の行動を説明した。それを冥琳は深く考え込み、眉間にシワを寄せる

「公瑾殿は、北郷の行動が判りますか？」

「・・・正直、判らん。一刀が報告に来るまで、奴の行動が何を示すのか判らないだろう」

「私は、この1週間奴の行動を見て、少し北郷を過剰評価していたと思います。殆ど寝ており、治安を良くする行動をまったくせず、賊共は私が追い払ったものの、奴でも充分他の賊共を取り締まる力はあるはずです。なのに・・・」

「まあ、深く考えてもしょうがない、これは一刀の報告を待つとしよう。思春、お前もここに残り、一刀の行動の真相を見極めろ」
「・・・御意」

二人は理解不能な一刀の行動に、複雑な表情を表し一刀を待った。
そして・・・

コン、コン・・・

「冥琳？俺だけど・・・」

第08章2節 報告！ Part2（後書き）

冥琳「結局、まだ本当の理由が聴けないままか・・・」

思春「冥琳殿、今北郷が着ましたゆえ、すぐに判ります」

冥琳「それもそうだな・・・じゃあ今から聴くでしょう・・・不可解な行動の理由をな」

作者「では、次回にあきらかになります『チリーン』・・・ドサッ

思春「また貴様のせいで次回か！せっかく冥琳殿の機嫌は良くなったの思ったのに！これではまた大n『ふふふふ』・・・冥琳殿！？」

冥琳「ふふふふ・・・どうしてくれよう思春？」

思春「落ち着いてください！自分が作者を退治しましたゆえ・・・」

冥琳「なぜワタシに斬らせてくれなかったああー！！！」

思春「怒るのそっちですか！？」

作者「また・・・放置ですか？作者は捨てられて嬉しくなる変態さんではないのですよ？」

では！コメント・指摘・評価・・・なんでもお待ちしております！

Later！

第08章3節 〽報告! Part3〽(前書き)

一刀が自分の行動を語ります! さて、どんなストーリーでしょう

第08章3節 〽報告！ Part3〽

「冥琳？俺だけど・・・」

報告の為に冥琳の部屋へ足を運び、失礼の無いように戸を叩く

「一刀か、入ってくれ」

「おつ、思春もいるのか、手間が省けてよかった」

「私に何か用だったのか？」

「用というより、思春もこの報告にいないと、納得できないかなあ
〽って思つてね、冥琳の許可をもらつて呼ぼうと思つてたんだ。つ
てな訳で・・・冥琳、彼女がいてもいい？」

「かまわん、しかしやつぱり思春が観察していたことを知っていた
のだな」

「思春には以前言つたけど、俺は殆どの氣を察知できるからね、思
春ほどの武人がいきなり氣配を殺すと逆にバレやすいよ？」

「・・・なるほど、以後氣をつけるとしよう」

「いや、たぶん氣づけるのは本当に俺だけだと思つから、大丈夫だ
よ。充分に思春は隱密に長けてるさ。それで、報告なんだけど・・・

」

そう一刀話を進めると、冥琳の表情が少々険しくなり

「ああ、それについてだが・・・お前が殆どこの1週間寝ていたと
報告したのだが。本当に寝ていたのか？」

「うん、寝ていた」

「理由はあるのか？」

「そりゃあ・・・」

一刀は一瞬思春へ視線を向け、にっこりと笑顔で

「すること無かったから」

「すること無かったから？」

一刀の爆弾発言に目を開く冥琳、そして僅かだがこめかみがピクピク動いているのが見える

「一刀、私は確か内政について案を出すから1週間街の状況を知るため自由をくれて聞いていたのだから？」

「その通りだけど？」

「なら何故殆どその自由時間に寝ていたんだ？」

「やることはちゃんとやってたよ？後は考えていたことを書簡に書くだけだからね・・・予定より時間ができちゃったから、ゆっくり寝ながら頭で考えたり、案を纏めたり…ね」

「予定より？」

「まあ、とりあえず報告書を読んでくれ」

一刀は冥琳にいくつか持ってきた竹簡の一つを渡す。そこにはシンプルに「治安」と題が書いてあった。彼女はそれを開くと思春と共に除きこむ。内容は――

中央区	-	○
北地区	-	○
東地区	-	×
南地区	-	×
西地区	-	

とだけ書いてあった。これを見た思春は意味がわからなかったが、冥琳だけは眉間に皺を寄せ、何か考えている表情を浮かべた

「・・・思春、本当に一刀は寝ていただけなのか？」

「は、はあ・・・町を少しぶらぶらしていた後すぐに宿屋で寝てい

ただけでしたが・・・」

「それだけでこうも簡単にわかるのか？・・・一刀、一体何をした？」

混乱中の思春を余所に冥琳は一刀に問いかける

「ちょ、ちょっと待つて。思春にもちゃんと説明しないと・・・後で納得してくれないから」

「む、致し方ない。これはだな思春、一刀から見た我らの街の治安評価だ」

「治安・・・ですか？」

「そうだ。民から、いろんな地区からの問題・・・盗難、喧嘩等、あらゆる件が毎日この城に報告がくる。その中でも、中央・北地区だけ苦情が少なく、東、南、西はその二つに比べてかなり多い」

「・・・はあ」

「しかし、毎日報告書を読んでも私なら判るものの、どうして一刀お前はたった一週間でこれに気づいた？普通に街を歩くだけなら判るはずがない。一週間、あまり念入りに歩かずただ散歩するだけだったら西地区以外は普通だと思うはずだ」

思春がやっと理解をした表情を見せたので、「じゃあ、続けるよ」と一刀が話しを進める――

「俺がさっき、『氣』を察知するのが得意って言ったよね？」

「うむ。誰がどこにいるのか、すぐに判るようだな」

「うん。それともう一つ・・・その人達の『氣』の性質みたいなものも判るんだ」

「性質？詳しく説明を頼む」

「うん、えっと・・・人は二つの『氣』の性質を持ってるんだ・・・

『陰氣』と『陽氣』という氣をね」

「陰氣と陽氣？」

「そう。それは人それぞれの感情とかによつて左右されるから、不安ごとや他の負の感情が少ないほど、その人の氣は『陽氣』に傾くんだ。逆にもしかりね」

「それがこの件とどういう関係なんだ？」

「えっと・・・今回俺は街全体の『氣』を歩きながら探ったんだ」

簡単に述べると、一刀は街を歩き、人々の『氣』を感じ取り、その地区ごとに陽氣と陰氣の量が異なっていることに気づいたらしい。そして各地区を歩き、その『氣』のバランスによつて治安を判断したらしい。民の不満が少ない、すなわち『陽氣』が多い場所には。
・民から不満があり、常に安心して暮らせない場所、すなわち『陰氣』が多い地区には×を与えていた

「それで、この街の地区を全部歩き、みんなの『氣』を感知した結果、北だけが以上に陽氣が多いとわく——冥琳？」

説明が進むにつれ、冥琳がプルプルと震えだし、それを心配した一刀だったが・・・

「あははははははははは！」

「め、冥琳!？」

「こ、公瑾殿!？」

急に笑いだす冥琳に驚く二人。そんなことは気にせず、笑い続ける

冥琳

「あははははは！ たった！ たったそんなことで、この街の問題事に気づくとは！ さすが一刀としか言えないわね。そんな方法があったなんて！ 確かにそれだったら簡単に気づくだろ。そんな評価をしたからには、ちゃんと改善策もあるのだろ？」

「も、もちろんあるさ。まずは治安だけど・・・」

冥琳の変貌振りに若干引く一刀だが、そこからは天の知識をフルに使い、この世界に見合った警備態勢、治安維持をするために必要な法……民がそれを理解し、賛同してくれる為の見返り等等、いろんな情報を冥琳に伝えた。そんな新しい情報を冥琳は目を輝かせながら真剣に聴いていた。一方、思春は頭がそんなに良くないのか、混乱した表情をしながらただじつと話を聴いていた

「・・・と、こんなことしたら民はこの法について賛成してくれると思うんだ」

「しかし、それを実行したら我らの税収が少し高くなり、民の反感を抱かないか？」

「うん、だからそこは・・・これを、こうして・・・そうしたら、みんなも納得すると思わない？」

「ほう、そんな方法があったとは・・・ふふ、すばらしい」

「おお！呉の大軍師にすばらしいと言われると嬉しいな」

会話が弾む二人だが、思春は未だに不可解な表情をして突っ立っていることに一刀はようやく気づく

「ああ！ごめんごめん思春、話し込んでしまつて」

「いや、それは問題ない・・・北郷、私はなぜこの場にいないといけないんだ？」

「うん。思春をここに呼んだ理由は今から詳しく説明するよ」

「・・・そうか、なら聴くでしょう」

再び思春は一刀に耳を傾ける

「了解。まず俺が思春の存在に気づいてたつてことはもうわかつた？」

「ああ、さすがにお前を欺くことが出来ないと認識した」

「思春も覚えてると思うけど、初日に北地区で俺が子供たちに話してたら泥棒が走ってきたの覚える？」

「ああ、運よく警備兵が人ごみから出てきて事を収めた件か？」

「『氣』を簡単に察知できる俺がその警備兵が来るって判ると思わなかつた？」

「・・・いや、お前だつたらわかつただろう。だから何もしなかつたのか？」

「うん、他の地区でも悪い『陰氣』を持ってる人達をみつけたけど、思春がかってにどんどん察知して退治していったでしょ？まあそのお陰で、俺はゆっくり寝れたし、あんまり行動しなくて済んだけど

ね」

「・・・知っていたのか」

自分のしている事がばれているのに少々悔しさがあるが、話を続ける

「それと私がここにいる理由が未だにわからんのだが・・・」

「うん・・・でね？俺が動く前に十分思春も他人のそういう『陰氣』に気づく能力があるんだ。たぶん、呉では俺を除いて一位だと思うよ」

「／／／／そ、そうなのか」

いきなり褒められて少し顔を赤くするも、満更ではない表情をする

「うん、そしてその『能力』が警備態勢の向上の礎になるんだ。だからさ・・・」

真剣な眼差しで思春を見つめ

「思春が警備隊を編成してくれるかい？」

「・・・は？」

いきなりの頼みに意味が一瞬わからなくなる。それを見かねた冥琳は

「一刀、唐突に勧誘しても思春が意味がわからないわ。ちゃんと説明しなさい」

「え？うーん、えつとね？思春」

「・・・ん？あ、ああ、なんだ」

「俺は思春のように『陰氣』をある程度察知できる人達が率いる警備態勢にしたいんだ」

「それで私に警備兵達が『陰氣』というものを感知できるよう訓練すればいいのか？言っておくが、私はそんなことどうやっていいかわかるはずがないよ」・・・なに？」

意味がまだわからない思春に一刀が更に説明する

「そういう能力はある程度生まれつきで天性的なものなんだけど、残りの部分は経験からくるものなんだ。思春はそういう強盗とか、賊が現れたってどうやって感知できた？」

「どうやって・・・とは・・・なんか、勘というk『そう、それだよ』——は？」

「そうやって『勘』で察知できるのは、体が『陰氣』を自然的に感知できるように今までの経験によって作られた体質なんだ。思春は今まで隠密行動をたくさんしてたから、敵陣をくぐり抜けたり、雪蓮とか普通の将達とまた違った意味の修羅場を潜り抜いてきたんだから、周りの『氣』を察知できるのに長けてるし、五感、主に耳と目と鼻だけど、人以上に利く。それが全部混ざり合って、己の周辺の異常に気づくのが上手になったって事」

一刀の詳しい説明によろやく納得のいった表情になる思春

「だから思春にはこれから警邏している兵達を観察してほしいんだ。それで思春の様に他人よりいち早く反応ができる警備兵を探してだして欲しい。そういうのは多分正規の軍兵にもいると思うから、定期的に警邏に回して、また思春が観察。そうやって思春には25人そういう人を探して欲しい」

「25人？」

「うん、各地区に5人ずつ。そしてその25人を隊長にして、各隊長の下に2人部下を配備したら、いろんな問題事にすばやく対応できと思う。そうやってその部下達に隊長の察知力・・・って言えばいいのかな、そういう能力を間近で経験させ、その部下たちにもそれを少しずつ養ってもらう。さっき言ったように、これは経験からも養える能力だからね」

「なるほど・・・」

「と、ここまで独断で決めてしまったけど、冥琳どうかな？自分でいうのもなんだけど、これは結構成功率が高いと思う」

今まで静観していた冥琳に振り向き、許可をもらう一刀

「ふむ、私もそう思う。思春、頼めるか？」

「それが呉の為になるのなら・・・喜んでその任に就きましょう」

「よかった！思春が承諾してくれなかったらどうなるかと思ったよ」
「ほう？思春が承諾しなかったら他の改善策はあったのか？」

目をキラリを光らせ、一刀に問いだす冥琳

「いや、殆どは思春まかせ……って冥琳怖い！怖いからその表情をやめて！」

「お前は！人任せな！改善策を！私が！納得すると！思ったのか！」

絶対零度の笑顔を向け一刀の目と鼻の先まで顔を近づけ問いだす

「い、いや、思春なら呉のために絶対引き受けてくれると思ったからだよ！冥琳だってそう思ったからこの案に賛成したんでしょ？」

「っ、む……まあ、そうだが……はあくこれじゃ怒るにも怒れないわね」

「ま、まあ、今度何かまた美味しい料理作ってあげるから」

「……ふむ、それで手を打とう。思春、お前がその任によつて起こる厄介ことは私と一刀が引き受ける、だから純粹にそういう能力を持った兵たちを探し出すだけに専念してほしい。以上だ」

「御意……必ずやご希望にお答えいたしましょう」

「ありがとう思春！手始めにそうだね、そうだね、初日にあの泥棒を捕まえた警備兵、彼もたぶん思春には及ばないけど、ある程度『陰氣』を感知できると思うよ。そういう人を探してくれたら嬉しいかな？」

「あ奴のような輩か……承知した。これで失礼する」

そう言つて、思春は冥琳の部屋を出て行つた

「さて、一刀。その竹簡の量からして、まだいろんな策があるのでしょう？詳しく聴かせてもらおうじゃないか」

冥琳は一刀の抱える後4、5つの竹簡を見て、目を輝かせながら一刀に問いかける

「あはは、了解！じゃあどれから始める？」

「かまわん。一刀の出す改善策は全部新鮮だからな。治安向上にある方法があるとは思っても寄らなかつたわ・・・まあ、せっかく聴いてくれたのだから・・・そうだな、その『生産改善策』というやつから始めてくれないか？」

「よし、それじゃこれは塩の生産についてだけど―――」

こうして、一刀と冥琳は夜遅くまで内政向上の為に話し合っていた

数ヵ月後

長い観察の上、思春は見事に才能ある警備兵達を抜擢に成功。一刀の改善策を実行した結果、雪蓮が支配している街の治安は大陸中が噂するほど良くなったそうだ――

――洛陽――

「なんでこんな事になってしまったの!？」

少女は先ほど兵士から届いた書状を読み、激怒する

こんなの!こんなの全部うそよ!

月が暴政を繰り広げるわけじゃないじゃない!

せつかく、せつかく私たちのお陰で洛陽に生気が戻ったっていうのに!

……駄目よ、今はそんな愚痴をする暇さえないわ。私の読みが正しければ、これから洛陽は――

月だけは、月だけはなんとしても守るんだから!

少女の瞳には固い決意が宿る

この時代に、まだ平和は訪れない

第08章3節 〽報告! Part3〽(後書き)

どうでしょうか?コメントを頂けるとすごく嬉しいです

第09章 〈Preparation〉（前書き）

長らくお待たせいたしました！

ちよつと自分の研究が思った以上に地獄で、執筆する余裕がゼロです！

ああ、俺も休暇がほしい！

第09章 〈Preparation〉

孫呉が着々と独立の為袁術の下で密かに力を蓄えている中、大陸中に雪蓮達にとっては吉報が広まる

霊帝の死

黄巾の乱での無策っぷりと無能っぷりを発揮し、そりゃもう威厳な無くなって当然というものだ

後漢王朝崩壊へのカウントダウンが始まった中、各諸侯の動きが活発になっていった

十常侍による何進暗殺

劉弁の暗殺

その十常侍も袁紹と董卓に殺害

董卓によつて劉協が献帝に祭り上げられ・・・

そんな醜い政争が董卓の手によつて収まり始まったが、権力を欲する人が居る限り争いは収まる筈が無い

また、新たな大乱が始まるうとする――

「袁紹から檄文？」

ある日、一刀を含む呉の主要メンバーで会議をしていると一人の兵が駆け込み、雪蓮に文を渡した

「冥琳、ちょっと読んでくれる？」

「何々………ほう………ふむ………なるほど」

「公瑾よ、一人で納得するでない。ちゃんと皆に説明せんか」

「あ、申し訳ありません。雪蓮、これは私達にとって好機だ」

「好機？一体何が書いてあったの？」

「思春、明命。周りを警戒しろ」

「「御意」」

「一刀、この王の間の辺りに斥候や袁術からの見張りはいるか？」

「うーん………うん、俺たちだけだよ」

一刀が少し周りの氣を探り大丈夫だと言うと、冥琳は皆に話しかける

「皆は現在、董卓が洛陽を制圧している事は知ってるな？」

全員が小さく頷く

「そこで袁紹がこんな檄文を送ってきた・・・簡単に言えば、『董卓が暴政を働いている。だから連合を組んで洛陽に行き、董卓を討伐し、天子様をお助けしよう』・・・とね」

「ふん・・・それが何で好機なの？」

「これは我々孫呉の独立に多いに影響するわ。ここで名声と功績を上げれば民が更に集まり雪蓮を慕うでしょう。袁術から独立するための力を集める絶好の機会よ」

「それに洛陽の兵は多いですからね、それに良い将もあちらに集まっていますし。飛將軍呂布、神速の張遼、猛将華雄。いやあ、強い人達がごろごろいますね」

「・・・そんな将達とぶつかって、袁術の兵達にも被害が当てられる可能性が増える・・・ってコトですか？穏様？」

「はい！！良くなりましたね、亞莎ちゃん！」

「あ、ああ、ありがとうございませう！」

褒められるのに慣れてないのか顔が真っ赤になり、長い袖で自分の顔を隠す亞莎。そんな微笑ましい師弟関係を見つめながらも、雪蓮はすぐに気をとりもどし、冥琳に問いだす

「・・・やっと、袁術の手から離れる機会が来たってことね、冥琳」
「ええ・・・ここで雪蓮の名声が上がれば、独立の機会はすぐに来るわ」

「ふふふ、楽しみね。よし！我々孫呉はこの連合に参加する！異論

のある者はいるか？」

王の威厳を溢れ出し皆に問いだす雪蓮。その姿に首を振る者はいなかった

「いない様ね・・・我々孫呉は参加する事は決まったけど・・・」

「ああ・・・一つやらねばならないことがある」

「やらなきや駄目なこと？それって何だ雪蓮？」

「それはね、一刀・・・・・・・・」

一刀が理解しておらず雪蓮に問いだす、雪蓮はキリッとした表情で真剣に一刀へ向き

「袁術のバカに参加を説得しに行かないといけないのよ！」

一瞬で情けない表情で一刀にしがみつくと雪蓮になった

「そ、そうなんだ・・・そんなに大変なの？」

「大変じゃないけど、ムカつくのよ！アホなのよ！バカなのよー！」
「しえ、雪蓮・・・ごめん、それじゃ意味がわかんないよ」

「それしか説明のしょうが無いのよ！そうだ、冥琳あなも『却下』めいりーん！！！！かずと、冥琳がいじめるー！うわーん」
「あー、おーよしよし・・・って、そんなにバカなの？袁術って」

おそらく説得を代わってくれ、と頼みたかったのだろう・・・その頼みを一刀両断され、涙目になって一刀に泣きつく雪蓮。そんな雪蓮の頭を一刀は適当に撫でながら冥琳に問いだす

「ええ、一刀はまだ会ってなかったわね。かなり頭がお留守の奴だ。雪蓮はそんなバカに会いたくないだけだろう・・・孫呉の恨みの対象でもあるからね」

「そんなことだけで、そんなことだけで、こんな風に駄々をこねるのか・・・」

「ちよつと一刀！撫で方に愛がない！愛が！」

「やかましい！そんなアホな理由でいつも苦労している冥琳に頼む雪蓮がわるい！」

「それでもよ！撫でるときにはいかなる時でも愛をこめる！これは貴方の存在理由よ！」

「俺が活躍できる場所って皆の頭撫でるだけか！？そんなのはいやだぞ！」

ギヤオス ギャー ギャー ギャー

二人が痴話喧嘩を始めたところ

「ふむ、それならば一刀、お前も一緒に行つてあげて欲しい」

つという冥琳の一言でピタツと雪蓮がとまる。そして次第に目を輝かせ・・・

「ホント！それならば退屈しないでいいわ！一刀それだったら早速行くわよ！」

「今から！？冥琳、俺が行つても大丈夫なのか？」

「ああ、お前も袁術を一目見れば我々が言っていることを理解できるだろう・・・後、我々の孫呉の独立の糧となる敵だ、一目みておいたほうが良いと思う」

「うん、良いんだつたら俺も一目みて起きたかつたけど」

「それじゃさつさと行くわよ！」ガシッ

ものすごい力で一刀の腕を掴み、引きずる雪蓮。一刀はずるずると引つ張られ、玉座を出ることになった

「ちょ、雪蓮！自分で歩けるから！は、離しても大丈夫——いや、もう離すな！今離したら立てない！もつとちゃん——しえれ——ん！！！！！！」

ズルズルズルズル・・・・・・・・・・・・・・・・バタン

玉座で残った将達は穏やかな笑顔でその光景を見ていた

「はっはっは、本当に策殿は北郷のことが気に入ったようじゃの」
「微笑ましいです」

「本当にね・・・さて、雪蓮は必ず袁術を連合参加させるでしょう。
我々は軍の準備をする！黄蓋殿と思春は兵の準備を！

「了解した」「御意」

「蓮華様は亞莎とともに兵糧の確保をお願いします」

「わかったわ」「は、はい！」

「穩は私の補佐を、他にやらねばならないことは山ほどある。先に
私の部屋に行って待機していてくれ」

「わかりました」

「小蓮さまは今回周々と共に残ってもらいます。独立のための準備
をしていてください」

「えー！私だけお留守！？そんなのイヤよ！」

「お願いします・・・我々の帰ってくる家を守っていてください」

「うーん、そういうことだったらいいわ。私が冥琳の帰ってくる家
を見ててあげる！」

「ありがとうございます。そして明命！」

「はい！」

「お前は洛陽に行き、本当に暴政しているかどうかを見極める！民は苦しんでいるかどうか確認しろ！そして連合の合流地で落ち合う。お前の観察が今後の方針を左右する、心して取り掛かってくれ」
「ぎよ、御意です！」

呉の皆に各仕事を与え玉座を出た後、一人玉座に残った冥琳は――

「お前だったら、暴政か善政かでこれからの行動を決めるだろう――
刀？明命・・・頼むぞ」

いろんな状況を考慮する冥琳、眉間に皺を寄せながら、ブツブツと呟きながら自分の部屋に戻り、戦の準備をする

一方、雪蓮と一刀は――

城を出てすぐに一刀は雪蓮の手から解放され、二人一緒に袁術の下へ歩いている

「ふんふんふふーん♪」

雪蓮は鼻歌をしながら、一刀の隣を歩いていた

「やけにご機嫌だね、雪蓮」

「そりゃ一人だったら嫌だけど、一刀とだったら楽しいわよ！」

「あはは、そういつてくれると嬉しいよ、でもちゃんと説得してよ？」

「わかってるわよ、説得自体は簡単だけど、孫呉の恨みの原因だと思うと、ついイライラしちゃうのよ」

「雪蓮・・・」

本当に呉の民を愛しているのだろう。彼女の瞳には本当に私利私欲の為に民に重税をかけるている袁術が許せないと物語っている

「もうそんな顔をしないの！もう少してこの呉の地を取り戻せるし、今はこの連合のことだけを考えましょ！」

「ああ、そうだな」

「そういえば一刀、最近あんまり城にいなかったけど、どうかした

の？」

「ん？ああ、そうか最近雪蓮にまったく会ってなかったね。結構最近街に行ってるんだ」

「街に？なんかあるの？」

「いや、西地区でちよつとね、いろいろな事をしているんだ」

「西地区ってあの野蛮人しかない場所？ま、気をつけなさいよ？」

「・・・何をしているか聞かないの？」

「んゝ一刀を信じてるし、後は、良いことが起こると勘が告げているし・・・まあ話したい時に言ってくれば問題ないわ」

「・・・ありがとう。今度話すよ」

「ん！待ってるわ」

信じてくれるといってくれる雪蓮。その雪蓮の愛する民と街を守るという決意がさらに強くなる一刀だった

その後は他愛の無い話をしながら袁術の城へ向かった。そして今一刀と雪蓮は玉座の間の目の前にいた

「袁術ちゃん、入るわよ」

一言入れ、玉座に入る二人。そして一刀が目にしたのは玉座に座っている長い金色の髪を持つ小さい女の子と、バスガイド（？）的な

服を着ているショートカットヘアの女性が隣に立っていた

「うむ、良く来たのじゃ孫策。一体何用で来たのじゃ？」

「袁紹からこんな檄文が来たんだけど、私たちも参加しないか……
って思ってたね」

「れいはお姉さまから？七乃、読んでたも」

「はいはい。えっと何々……つまり、『洛陽で暴政を働いてる
董卓を皆で懲らしめちゃいましょー！』って書いてありますよー」

「それでどうする袁術ちゃん、これは参加したほうがいいと思うわ
「そうかの？七乃、わらはどうしたらいいかの？」

「そうですねー……参加したほうがいいと思いますよー。もしか
したら洛陽を救った美羽様が新しい皇帝になれるかもしれませんよ
？」

「皇帝になれる」という七乃と呼ばれた女性の一言で興奮る袁術。
雪蓮が説得している間、一刀はずっと隣で袁術のもう一人の女性を
見ていた

SIDE 一刀：

驚いたな……

こんな小さい子が袁術なんて。そして隣の人は……誰だろう。ま
あ後で判ると思うけど……

それにしても、こんな小さい女の子が民に重税を掛けて苦しめてい
るだど？でも彼女の氣は……そして隣の人は……

そして周りの文官や武官達は・・・

なるほど・・・そういうことが・・・なんて悲しいんだろう
なんて・・・無知なんだろう・・・

そして、こんな馬鹿な理由で雪蓮達は袁術を恨んでいるのか・・・

これじゃあ雪蓮が可哀想だ・・・

とりあえず、今はもう考えないでいよう。独立の為、連合参加の
ほうが一大事だ。つとは言うものの、説得も糞もないな。もう参加当然
の雰囲気じゃん。さて、後は戻って準備しないと

とうとう反董卓連合が始まるんだな

SIDE OUT:

「ところで、そこにおる奴は、誰なのじゃ？」

一刀は頭の中でいろんな事を考えていると、袁術が一刀に振り向き雪蓮に問いだす

「紹介がまだだったわね。一刀、自己紹介しなさい」

「うん。こんにちは袁術ちゃん。北郷一刀とつていうんだ。一応天の御遣いって皆に呼ばれてるよ」

いきなり天の御遣いとはらした一刀に雪蓮が少し見開き何か言おうとしたけど一刀が雪蓮に目を配らせ『いいからここはまかせて』風なアイコンタクトをする。それを見た雪蓮はもう何も言わず、ただ心配をするだけだった。もし噂を聞いているのなら、袁術は一刀を寄越せというだろう。そして断つたら多分孫家に多いな被害が起きるだろう・・・そんな心配をしているが会話はずっと続くだけだった

「なんと！天の御遣いなのかや！すごいー綺麗な服をしているの」

「あはは、ありがとう。でも袁術ちゃんの服のほうが綺麗だよ？」

「そうですよー、こんな天の御遣いなんて胡散臭い人の服より美羽様の服のほうが断然可愛いですよー」

「そ、そうか？うははははは、もつと褒めてたもー！」

「ははは、可愛い可愛い」

「美羽様万歳、可愛いぞこのやろー！美羽様の可愛さ天下第一！」

さすがにこの会話には雪蓮は驚いていた。民達の噂など太守にはすぐに報告があるはずだ。それが袁術は今始めて聞いたかのような振る舞いをしており、隣の七乃という女だってまったく気にしていない態度だった。

「わらわの紹介がまだじゃったの、わらわは袁術じゃ！北郷一刀とやら、これからは孫策と共に、わらわの下で良きにはからえ」

「私は張勳といえます。これからよろしくお願いいたします北郷さん」

「あはは、これからもよろしくね、二人とも」

「うむ！お主はまったく嫌な感じがしないのじゃ！よろしくしてやるのじゃ！」

「それじゃ、そろそろ準備しなくちゃならないから、連合には参加ってことでいいわね袁術ちゃん？」

お互いの紹介が終わったところで、この場にもうこれ以上いたくないオーラを出していた雪蓮が言葉を発する

「おお、そうじゃの。七乃、参加することで良いのじゃな？！」

「はい、それじゃこれで終わりということだ」

「うむ！北郷とやら、またくるのじゃぞ？」

「ありがとう、機会があつたらその時に会おうね」

「それじゃこれで失礼するわ」

そういつて二人は袁術の城をでるのだった。帰り道にずっと静かだった雪蓮が口を開く

「一体どういうこと、一刀？」

「・・・どういう事とは？」

「とぼけないで、どうしていきなり天の御遣いという事を言ったの？今はまだそれを名乗る時期じゃないのは知ってるでしょ？ましてや袁術ちゃんにそれを言うなんて・・・」

「それなんだけどさ、雪蓮——」

「なによ？」

「袁術ちゃんのことなんだけどさ・・・」

「・・・」

「・・・いや、やっぱり今はいいよ」

「ちよつと！その言い方はすごい気になるじゃない！」

不満気MAXの表情を出す雪蓮

「うーん、今は言う必要がないよ」

「それでも気になるのよ！」

「・・・それじゃ、少しだけ」

そういつて一刀は一時思案し、やがて口を開ける

「白という色はいろんな色に染まり易い。ずっと白を保ちたいなら、自分でなんとかしないといけない。周りに黒しかない場合は特にね・
・・」

一刀はそれだけを言った後、少し悲しい表情になった

「??????」

「今は多分わからないと思うよ。でも、雪蓮ならいつかはちゃんとわかってくれると思う」

「意味がわからないわよ・・・」

「まあ、何はともあれ、どんな結論に至っても、俺は雪蓮の味方だから」

「????・・・とりあえず、ありがとって言うておくわ」

「はははっ！とりあえず、今から戦の準備をしないとね！」

「・・・ええ！」

未だに一刀の発言がわからない雪蓮・・・

でも、一刀が理由のない発言をしないと信じ、心の隅に彼の言葉を留めて置くことにした

「さ、帰ってちゃんと戦の準備をするわよ！ここで一気に独立まで行くわ！ついてきなさい、一刀！」

「はは、了解！ちゃんと俺も頑張るよ！」

反董卓連合まで後少し・・・

第09章 〈Preparation〉（後書き）

誤字などありましたらメッセージください！

他に、コメント、指摘、評価、何でもお待ちしております！

〈Lynx

変更点： 趙遼↓張遼

袁術が言う台詞で「雪蓮」↓「孫策」

また何かありましたら、コメントください（ペコ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4315t/>

恋姫†無双～治癒の力を持つ者～

2011年10月10日03時21分発行